Guiding Star

綾野雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇｕｉｄｉｎｇ　Ｓｔａｒ

【Ｎコード】
Ｎ９６８１Ｅ

【作者名】
綾野雅

【あらすじ】
五千年前―かつて理想郷と呼ばれ、突然その幕を閉じた『紅劉国（こうりゅうこく）』に憧れる女子大生の勇希は友人と訪れた占い師に『藍色の瞳をした青年を探せば死ぬ』と告げられる。母から渡された鍵をきっかけに開かれる真実とは―。『ＧｕｉｄｉｎｇＳｔａｒ』１作目。数年前に出版されたものと同内容です。

プロローグ

「クシュン！」

少女は小さくくしゃみをした。

「あーもう。また誰か噂してるなー」

ポケットからティッシュを取り出すと丁寧に鼻をふく。九月下旬の暖かい秋の陽の光が彼女の長い栗色の髪に降り注いだ。

彼女の名は奈波勇希（ななみゆうき）。二十歳になったばかりで、劉翔学院（りゅうしょう）大学の三年生だ。たった今、今週最後の講義である『紅劉国古代文明（こうりゅうこく）』の授業から解放されたばかりである。勇希は幼い頃からいろんな古代文明に興味を持っていた。そんな彼女のお気に入りの文明は紅劉国である。

紅劉国とは約五千年ほど前に建国された一大大国で、勇希の住んでいるところからするとちょうどこの惑星を半周したところに存在していたと信じられている文明のことである。そこは二千年という長い間、犯罪や災害といった問題のない、いわゆる理想郷のような場所であった。

一年を通して春のような過ごしやすい気候が続き、豊かな土地のおかげでいつも農作物は豊富にあった。この国の王家は代々正しく平等な統治を行い、その民のことをこよなく愛し、また、国民も彼ら

の王を慕い、その忠誠を誓った。

ところが、そんなユートピアとも言えるような国にも突然の終焉が訪れる。国内で戦争が勃発したのだ。この理想郷をあっという間に塵埃へと変えてしまうのに二年もかからなかった、と言われている。

現代の全技術をあわせてもおよばないと言われるほどの偉大な文明であったが、その歴史を変えてしまうことになった戦争についての文献は未だ見つかってはいない。このかつて完璧であった大国を無にかえしてしまうような戦争が起こった理由は誰にもわからないのである。

「もし、何か手がかりでも見つけることができたなら…」

勇希の夢はなかなか叶いそうもなかった。

＊＊＊

「おーい、奈波！待てよ！」

誰かが叫ぶ声が聞こえた。勇希のセピア色の瞳が鮮やかなオレンジ色の髪をした若い男の姿を捕らえる。

「立花君？どうしたの？つくもと一緒にいるはずじゃなかったっけ？」

立花と呼ばれた男はものすごいスピードでメインキャンパスから中庭に続く階段を駆け下りてきた。

「そんなに急いだらこけるわよ…」

勇希が言い終わる前にオレンジの髪をした男は最後の一段に足をとられ、コンクリートに思い切りしりもちをついた。

「…っつ！」

男はかみ締めた歯の奥で声にならない悲鳴をあげる。

「あーあ。聞いてくれれば痛いよって教えてあげたのに…」

男は勇希が差し伸べた手を無視して立ち上がると汚れたズボンを両手で掃う。

「うっせえな。コケたいときはコケるんだよ、俺は。お前の助けなんかいらねえったら」

敬介はそういうと、すねたように勇希から目をそらす。

「ちょっと、なんで私に怒るわけよ。自分が悪いんでしょ」

勇希はアッカンベーをしてみせた。

立花敬介（たちばなけいすけ）、それがこの派手なオレンジ色に髪を染めた短気な青年の名前である。彼もまた、劉翔学院大学の三年生である。二浪しているので勇希より二つ年上だった。勇希は敬介をあたかも本当の兄弟のように慕っていた。ぶっきらぼうに話してはいるが、心の奥では敬介がいつも勇希のことを心配していることを勇希はちゃんと知っていた。

二年前、音楽のクラスで出会ってからというもの、敬介はいつも勇希のことを見守ってくれていた。そんな敬介に勇希は感謝してはいるものの、彼のやさしさが敬介の彼女である安東(あんどう)つくもを嫉妬させていることも勇希にはよくわかっていた。

勇希はこれまでに何度かつくもに敬介に対して特別な感情がないことを言ってみたが、つくもはいつも勇希と競争しようとした。

「あーあ。夢の王子様さえ見つかれば、こんな気を使わなくても済むんだけど…」

勇希はふっとため息をもらした。

「え? 何言ってんだ、お前」

敬介は目を細めて勇希をじーっと見た。

「え? な、なんでもない、なんでも。私、なんか言ったっけ? あははは」

気づかないうちに思わず口に出していたらしい。勇希は顔を真っ赤にしながらもとりあえずその場を取り繕おうとわざとらしい笑みを浮かべた。

「あー! 敬介! やっと見つけたあ!」

若い、小柄な少女が突如現れたかと思うと敬介の右腕にしがみつい

た。

「つくも！何やってんだ、こんなとこで。清田先生の実験の手伝いをするんじゃなかったのか？」

敬介はまだ自分の腕にしがみついている少女の顔を覗き込んだ。

「あら、忘れちゃいないわよ。ただ、あんたを一緒に連れて行こうと思ってさ」

つくもと呼ばれた少女はそう言いながらおもいきり敬介の腕を引っ張った。

安東つくもと敬介は幼なじみだった。つくもがこの大学の１年生になってから付き合いだしたようだがどちらかといえば兄妹のようにいつも口げんかが絶えない。

「あ゛―！！そんなに強くひっぱんなよ。もっとこう、優しくなれないのかよ、ほら、フツーの女の子みたいにさ？だいたいなんで俺がお前と一緒に行かなきゃいけないんだよ。お前が自分で買って出たんじゃねえか。俺は知らねえよ」

「あたし？優しくだって？冗談じゃないわよ！あんたはあたしの彼氏なんだから、あたしの言うことは聞かなきゃいけないの。そうよね、勇希？」

つくもはなおも敬介の腕を強くつかみながら勇希を挑戦的な瞳で見つめた。

つくもは勇希より１５ｃｍも背が低く２歳も年下だったが、彼女の

きつい緑色の瞳は強く冷たい光を放ち、その瞳で睨みつけられたものは誰もが口を閉じるしかなかった。

（つくもとはぜったい闘いたくないわ。いくらあの子が私より小さいとはいってもあの子がほんとに怒ったら私なんて絶対勝ち目ないもの）と勇希は思う。

勇希は心の中でそっとため息をつくと大きな微笑を浮かべてつくもに賛同した。勇希が手を振って見守る中、かわいそうな敬介はつくもに強引に引き摺られるように化学実験室へと消えていった。

第一章：運命の足音（1）

「…ユル…ナユル…」

誰かが少女の名前を呼んでいる。

（誰？私を呼んでいるのは。誰なの？私、この人の声を知っている。彼は…）

甘く強い低音の男の声が勇希の頭の中にだんだん大きくはっきりとこだましてきた。勇希は暗闇の中に立っていた。周りを見回したが、闇が深すぎて、自分の手すら見ることができない。

「誰なの？どうして私のことをナユルって呼ぶの？」

勇希は目に見えない相手に向かって問い掛けた。

「君には危険が迫っている。ここから逃げるんだ。俺がいつでも守ってやる。何があっても、俺は君と一緒にいるから…」

そう謎の声は続ける。

勇希はその声を知っていた、だが彼女の意識は暗い影に覆われて声に出して呼びたいはずのその人の名を思い出すことができない。

突然、勇希は完璧な暗闇の中、二つの藍色の瞳が自分を見ていることに気がついた。

「あなたは！」

その名を勇希が口にする前に、その男の姿は消えうせ、代わりに勇希はうす暗い不思議な部屋に立っていた。

＊＊＊

「どうぞ、お座りなさい。おじょうさん」

丸いテーブルの向こうから黒いケープを絹のような白髪にかけた老女が勇希に声をかけた。

「そうよ、勇希、あんたの将来を聞いちゃおうよ」

勇希の高校時代の友達だった咲が丸テーブルの前に置いてあったいすに勇希の背を押して座らせた。

黒いシルクの布がかけられたテーブルの上には大きな水晶玉が赤いベルベットのクッションの上で妖しげな光を放っている。

「でも、咲、私、未来なんて知りたくないのに…」

勇希は反発して古くからの友人のほうを見上げる。

「まあまあ、今日はあんたの１６才の誕生日でしょ。楽しまなくっちゃ。それに、彼女、なかなかすごいって噂だし。ね、ちょっとだけ、お遊びだと思ってさ」

咲は勇希にウインクしてみせる。

勇希はそんな咲をみて、言い争っても無駄なことに気がついたので、素直に言うことを聞くことにした。勇希はふっとため息をもらすと占い師のほうに向き直った。

暗闇の中、勇希にはこの占い師の白い髪と白く骨ばった手に真っ赤なマニキュアをした爪だけがはっきりと見えていた。

「よろしいですか、お嬢さん。では、両手をこの水晶の傍に添えてください。触らずに、ただ傍に添えればいいのです。そう、いいですね。では、目を閉じて、頭の中にこの水晶玉を思い浮かべて…水晶玉があなたから全ての気を受け止めることで、私にはあなたの未来に何が待っているのか見ることができますから」

その年老いた見かけとは裏腹に、占い師の声はとても優しく、はっきりしていた。

勇希が言われたとおりに目をつぶると、水晶玉が少しずつ光を放ちだした。光は叙々にその大きさを増し、まるで太陽のようなまぶしさで、咲は思わず目を閉じる。

「これは…！」

勇希は占い師が息を飲むのを聞いた。その金色に輝く眩しい光は閉じた勇希の目にも感じられた。

「なにが起こってるの？」

勇希は誰にともなく問い掛ける。

「あなたは…」

占い師はいったん呼吸を整えると、言葉を続けた。

「あなたは古代帝国で大変重要な人物の一人…さあ、お嬢さん、もう目を開けても大丈夫」

占い師の声は今や興奮でうわずっていた。言われて勇希は目を開ける。水晶玉はまだ金色に輝いていたが、前ほどその光は強くなかったので、目を細めなくても水晶玉の様子がはっきり見えるようになっていた。

「ここに5つの珠が浮かんでいるでしょう？これがあなたの守護者たち。いつもあなたのことを守ってきたのね」

占い師はやせこけて骨ばった指で水晶玉を指さしながら言った。

勇希は水晶玉の中で赤、青、緑、オレンジ、そして紫色に輝く5つの珠をみつめた。

「勇希、あんたの理想の彼のことを聞いてみなよ」

突然、咲が勇希の耳元に囁いた。

「なっ！」

親友の顔を見た勇希の顔は真っ赤に紅潮していた。

勇希がなにか反論しようとした時、突然占い師が耳をつんざくよう

な悲鳴をあげた。勇希と咲はなにが起こったのかわからず、お互い顔を見合わせる。

占い師を振り返ると老女の顔はまるでこの世のものではないものを見たかのように血の気が失せて真っ青になっている。彼女の目は恐怖で大きく見開かれ、水晶玉に釘付けになっている。その水晶玉の中央から黒い影が現れ、金色の光を闇へと飲み込もうとしているのが見えた。

「陛下、その男のことを捜すのはおやめください」

しばらくして正気を取り戻した占い師の声は硬く、その瞳は妖しい光を放っていた。

「どういうことなの？」

勇希は問い返した。そうする間にも水晶玉の中では深紅の液体が滲み出て、黒い影をどろどろした血の海に染めていく。

占い師は勇希の腕をぎゅっと握り締める。この骨ばった手のどこにそんな力があったのか、勇希の腕はみるみるうちに血の気が失せて白くなっていく。

「決してあなた様の理想の男をお探しになってはなりません。なにがあろうと、見つけ出してはいけないのです」

「なぜ？どうしてそんなことを言うの？もし、見つけちゃったらどうなると言うの？」

腕にかけられた強い力が勇希に理由を聞いてはいけないことを語っ

ていたが、勇希はどうしても聞き返さずにはいられなかった。

占い師の手は勇希の腕をいっそう強く握り締め、あまりの力に勇希はおもわずうめき声をあげそうになる。

急に腕の痛みが弱まった。ふと気が付くと、勇希の周りには再びあの混沌とした闇が漂っている。ただ、彼女の頭の中で、あの老女の静かだが、有無をも言わせぬ声が響いた。

もし、あなた様があのお方を見つけてしまわれたなら、それはあなた様が死を迎えるときです…と。

勇希は全身がしびれていくのを感じていた。彼女の身体は闇の奥深くへと沈んでいった。魔の暗闇の奥底へと沈みながら、なにもかもがうつろになっていく。ただ、あの占い師の声だけが勇希の心にはっきりこだましていた。

「あのお方を探してはなりません…決して探そうなどと思われるな…でなければ、あなた様は死んでしまう…」

第一章：運命の足音（2）

「…っ！」

勇希はセピア色の目を開けた。あの暗闇はどこにもない。勇希は自室のベットに横たわっている自分に気がついた。学校から帰ってから眠ってしまったのだろう。壁の時計は６：３０を指していた。

「また、あの夢…」

勇希の心臓が体から飛び出んばかりに激しく脈打っている。彼女の額にはついさっきまでの悪夢のお陰で汗が光っていた。

「なんでいつもあの夢をみるのかしら？それに私を呼んでいたあの青年はいったい…私、あのひとの瞳を知ってる。あの、優しい瞳。それだけじゃない、あのひとの声も、私、知っているはずなのに、どうして誰だか思い出せないの？」

４年前、勇希と咲はあの占い師のところを訪れていた。勇希は今でもはっきり、あの老女が理想のひとを見つけてはいけないと言ったときに感じた悪寒を覚えている。

「それに、あの気味の悪い水晶玉…」

勇希は自分の体が恐怖に震えていることに気がついた。

勇希は幼い頃から同じ少年の不思議な夢を見ていた。成長するにつ

れ、はじめはっきりしていた少年の顔はだんだんその輪郭を失い、ついにはその形さえもわからないほど薄れていた。勇希はそのことが何か悪いことが起こる暗示ではないか、と思い、あの占い師の夢がそんな勇希をますます不安にさせていた。

「勇希！ちょっと降りていらっしゃい。見せたいものがあるの」

階下から母親の呼ぶ声が聞こえる。

「わかったわ、母さん。今いく」

勇希は返事をすると一階のリビングへと降りていった。

＊＊＊

「鍵？」

勇希はたった今、母親に渡された鍵を自分の手に取ると、まじまじと見つめた。上部には詳細な飾りがついており、見慣れない文字が彫られている。勇希はもっと良く見ようと目を細めてみたが、さびついた鍵の文字を読むことはできなかった。

「あなたにこの鍵を返しておいたほうがいいんじゃないかと思ってね」

勇希の母は落ち着いた声で言った。

「返すって、どういうこと？私、こんな鍵、見た事ないよ。これって、いったい何の鍵なの、母さん」

勇希は母の優しい灰色の瞳を見つめた。勇希の母はもう５０代前半だが勇希が幼いころからほとんどかわらず、とても若々しく美しい女性だった。

そんな彼女は小さな消え入りそうな笑顔を浮かべて答えた。

「でも、それはあなたの鍵なのよ。あなたが生まれてきたとき、小さな手でしっかりとその鍵を握っていたんだから」

「私が…なんですって？」

勇希は自分の耳を疑った。

鍵とともに生まれてきた赤ん坊。そんなこと実際にあるわけがない。だが、勇希は自分の母親がそんなたちの悪い冗談を言うような人ではないことを十分承知していた。案の定、母親の顔はいつもとなく真剣な表情で勇希を見つめている。

「勇希、その鍵があなたにとっていったい何なのか、私にはわからない。何を開けるためのものなのかも。でも、あなたが生まれてくるときにあんなにしっかりと握り締めていた鍵なんですもの。何かきっと大切なものに違いないわ。あなたも自分の運命を受け止められる年になっているし。だから、今、これはあなたが持っている必要があるの。あなたなら絶対、自分の進むべき道を見つけることができるわ。そして、この鍵がいつか辿らなければならない正しい道を教えてくれるはず」

「母さん…」

勇希はなにか言いかけて、なにも言うべきことがないことに気がついた。自分の手のひらに置かれた錆びた鍵に視線を落とす。

「私が生まれたときから持っていた鍵…いったい何だっていうの？」

＊＊＊

その夜、勇希は長い間忘れられた記憶を見つけ出そうと考えてみたが、断片さえも思い出すことはできなかった。

「ま、いっか。明日になれば何かわかるかも」

ふっとため息をつくと、鍵を机の上において、寝床に就いた。

あっという間に勇希は眠りについていた。自分の運命が深く、長い眠りから覚めて歩き出していたことも知らずに。あの古く、錆び付いた鍵だけが、妖しい光に輝いて、危険への幕開けを告げていた。

第二章：図書館（1）

次の日、勇希は一人でお気に入りの灯台に行くことにした。その灯台はおよそ１００年ほど前に建てられたもので、以来、この街のシンボルになっていた。今ではもう使われていない。

いつもなにかしら問題を抱えると、勇希はいつもこの灯台に来て、広く青い海とその上に果てしなく広がる青い空をただ眺めるのだった。

灯台のてっぺんで前の晩に母親から手渡された鍵を手にじっと長い間座っていた。そうすれば、その鍵について、なにか答えを見出せるかもしれないと思ったのだ。

だが、やはりなにも思い出すことはできなかった。それも無理はない、なぜなら彼女はただ自分の前世の記憶を探っていたのではないのだから。ほんの少しでも前世の記憶を持っているという人のほうがめずらしいのだ。

もし、あの占い師の言葉が真実だとすれば、勇希は古代において、重要な人物の一人だったということになる。だが、もしそうだとしても、それがこの鍵となんのかかわりがあるというのか、自分がどのような人生を前世で歩んできたかということだけでなく、生まれ変わった時に手にしていたという鍵の謎をとかなければ意味がない。

この鍵が自分にとって大切なものだということも、そしてそれが何を意味するのかを思い出さなければ何か大変なことが起こる、ということも勇希にはわかっていた。だが、漠然とした勘以外はなんの

手がかりさえ見つけられない。

暖かなオレンジ色の夕陽が海面に照り輝いて、まるで金色の絨毯のように見える。

勇希はジーンズのポケットからチェーンを取り出すと、鍵の飾りがついた部分に通し、首にネックレスのようにかけると、失われた記憶を探すのを半ばあきらめ、灯台を出ようと立ち上がった。

その時、鋭い叫び声が灯台の建物にこだました。勇希はあたりを見回したが、誰もいる様子がない。

「錯覚、かしら？」

不思議に思いながらも出口へとまた足を向けた時、助けを求める声が聞こえてきた。勇希はキッと真剣な表情になると誰もいない空間に呼びかけた。

「誰なの？怪我してるの？どこにいるのか返事して！」

だが、海の漣の音以外はなにも聞こえてこない。さっきまで聞こえていたうめき声はまったく聞こえなくなっていた。

「疲れてるのかな」

勇希は苦笑いするとできるだけその場を早く立ち去ろうと出口へ急ごうとしたその時、勇希の胸の上に提げられていた鍵が突然金色に輝き出すと、まるで目に見えない誰かが引っ張っているかのように、ひとりでに宙へと浮かび上がったのだ。

「なっ！」

思わず勇希は息を呑む。

そのセピア色の瞳はまるでお化けでも見たかのように大きく見開かれている。鍵の先端が指している方向を見やると、地下へと下りる、錆びた鉄製の階段が見えた。

「な、あんな階段、今まで見たこともないわ…なんなのいったい」

もう幾度となくこの灯台に足を運んでいる勇希は、この灯台のことを隅から隅まで知っていたハズだった。もし、そこに階段があったのなら、必ず今までに気付いているはず。

知らないうちに、勇希の足はその階段へと向かって歩いていた。階段を降りきると、奥のほうに大きく、古い銅製の扉が見える。その扉は外から吹き込んでくる潮風のおかげですっかり錆付いて変色していた。

そばに近づいてよく見ると、扉の中央には大きな翼を背にかかげたライオンの紋章が描かれ、その下には古代文字のようなものが見受けられる。錆ついてはいたものの、勇希はその文字をなんとか読むことができた。

「偉大なる戦士の鍵を持つ者のみこの扉を開くことができるであろう」

勇希はこの文章をどこかで読んだような気がしてならなかった。扉を少し調べてみると、埃で隠れてはいたが左側に小さな鍵穴をみつけた。

「そうか、鍵よ！」

勇希は自分の首にさげていた鍵をはずすと、埃まみれの鍵穴の中に突っ込んだ。深呼吸を一つすると、ゆっくりとその鍵を回す。一度カチッと錠が外れる音がすると、その大きな扉がおおきな軋んだ音をたてながらゆっくりと開き、その背後に隠されていた部屋が現れた。そこは、大きな書庫のような部屋だった。

「うそ…」

勇希は自分の目を確かめるように部屋を見渡した。

部屋の3つの壁という壁が床から天井までびっしりと古そうな本で埋め尽くされている。目の前にある壁の上部には小さな窓がついていて、そこからやわらかな夕暮れの光がこの大きな部屋へと差し込んでいた。目の前に大きな机と椅子があるのが目に入った。

机の上には2冊の本が、まるで見つけられるのを待っていたかのようにたたずんでいた。一つはとても大きな本で古びた皮の表紙がついていた。勇希が手でそっと本の上に積もった大量のほこりを払うと、「紅劉国之歴史」というタイトルが浮かびあがる。

「紅劉国ですって？！」

勇希は思わず叫び声をあげた。

この本は勇希が長い間捜し求めていたその本に違いなかった。あの失われた帝国について書き記した者は誰もいない、少なくともそう考古学者の間では信じられていた。

勇希は7年もの間、この帝国について調べてきたが、なんの書物も見つけることはできなかった。それが今、彼女の目の前に静かに横たわっている。

その本を見ようと表紙に触れた瞬間、後ろで扉が無造作に閉められた音を聞いた。

「ちょっと！」

勇希は驚いて扉のほうへ駆け寄った。扉を開けようと引っ張ってみたが、鍵がかかっているのか、びくともしない。

「君が探しているのはこの鍵かい？」

子供の声が分厚い銅製の扉の向こうから聞こえてきた。勇希はこの部屋に驚いて、鍵を扉の鍵穴につけっぱなしにしていたのだ。

「ちょっと、ここを開けなさいよ！」

叫ぶ勇希にうれしそうに笑う男の子の声が聞こえる。

「ごめんね、お姫様。でも、僕は君をここから出すわけにはいかないんだ。ダコス様がこの鍵をご所望なんだよ。そして、君がここで死んでしまうことをね」

「何ですって？ダコス様？あなた、いったい何言ってるのよ？あなたは誰なの？」

だが、その声は彼女の問いには何一つ答えない。かわりに勇希は足

音がどんどん遠くなっていくのを聞いていた。

「ちょっと！待ってよ！」

勇希は悲鳴にちかい声をあげた。

「ダコス様に感謝しな、お姫さん。ダコス様は君をかわいそうに思ってるんだ。だから死んじゃう前に君がずっと知りたがっていたことを教えてあげようって。ま、せいぜい楽しむことだな」

邪悪な笑い声が図書館にこだまし、勇希は静寂の中に取り残された。

第二章：図書館（2）

流真津子（ながれまつこ）はいつものように実験室で作業をしていた。

真津子は世界でも有数の実業家、流眞（ながまこと）の一人娘だった。真津子の母は彼女を産んですぐに死んでいた。眞は再婚することなく、一人娘である真津子を一人で育ててきた。彼のたくさんの友人や親戚はみな口をそろえて新しい妻を娶るように促したが、眞はただ首を振るだけだった。

ある日、眞の母親は自分の息子がなぜ新しい妻を娶ろうとしないのか問いただしたことがある。そのとき、眞は微笑みながら自分の年老いた母親を見るとやさしい声でこう答えた。

「母さん、私は妻が逝く前に彼女と約束したのですよ。私はいつまでもお前を愛している。そして、私の命にかけて私たちの娘を守っていくと」

真津子は前世の記憶を持つ特別な子供だった。彼女は昔、マホーニー・チェリッシュという名前で知られていたこと、そして失われた帝国を守る五大戦士の一人であったと言う。前世では他の四人の戦士たちと能力（ちから）をあわせ、彼らの皇女とその国を悪の手から守っていたのだ、と。

眞はなんと言っていいのか、何を信じたらいいのかわからず、ただ娘の話を聞いていたものだ。ただ、娘が言葉を話したり歩きだす前から何か不思議な力を持っていることに眞は気づいていた。真津子は瞬間移動することができたのだ。また、念動力やテレパシーの能

力も兼ね備えていた。

その能力は何度も眞を驚かせたが、眞が自分の娘を心の底から愛していることに変わりはなかった。

真津子は母親似のとてもきれいな子供だった。だが、持って生まれた不思議な力を近所の子供たちは恐れていたために彼女はいつも一人だった。一度だって誰かを傷つけようと力を使ったことはなかったが、いつも自分の力をコントロールできるわけではなく、時折、良くないことを起こしてしまうのだ。

そんな娘を眞はいたたまれない気持ちで見守っていた。自分のあわれな娘を助けてやりたくて、眞は長い間その方法を世界中探し回った。不運にも、娘を助ける方法は見つからなかったが、眞はこの非情な世界で自分の娘と同じように苦しんでいる子供たちが大勢いることを知ったのだ。

眞はそういう子供たちの世話をすることに決めた。そうすることによって、少しでもこの厳しい社会から彼らを守ることができれば、そう願って設立したのが流クリニックだった。

5年ほど前、眞は加瀬満（かせ みちる）という名のある若い男と出会った。

眞の仕事が起動に乗り始め、外国に出張することが多くなった時期で自分の留守の間に、施設の子供たちを世話する人間を雇う必要があったのだ。

満は変わった男だった。医学に特化した京成(けいせい)大を卒業したばかりだという。満は大きな図体にもかかわらず、小さな子犬のような優しい心をしていた。

眞は直感的にこの男を気に入った。そして、満は面接の次の日から眞のクリニックで働くことになったのである。

数日が過ぎ、眞は仕事のために1ヶ月ほど外国に行くことになった。眞が明日、出張という日、真津子は両足に大きなあざを作って学校から帰ってきた。クラスメートが瞬間移動をやってみせろと言ったのだ。自分の力をコントロールする方法をしらなかった真津子は、言われた通りに瞬間移動することができなかった。そんな真津子をクラスメートたちは嘘つきと言って突き飛ばしたのだ。

いきさつを聞いた眞はかっとなると娘の学校に乗り込もうと息巻いた。そのとき、突然、満が眞を止めたのだ。満は言う。真津子に父親からの保護は必要ない、と。

「必要ないって、どういう意味だ！」

眞は虎のように吠えた。

「どうか、落ち着いてください、流さん。あなたが娘さんを護りたい気持ちはよくわかります。でも、私たちが彼女を一生護ってやれるとは限らない。いや、あなたの娘さんだけじゃない、ここにいるすべての子供たちに必要なのは、自分自身を護る術です。私たちがしなければならないことはただ保護してやるだけじゃない、彼らが持っている能力をコントロールする方法、それを教えてやることだ。自分の力をコントロールできるようになれば、もう誰も恐れる必要はないのだから」

満は上司である眞を静かに説得していった。

眞は満の深い灰色の瞳を長い間見つめていたが、ふと、その奥に隠されている何かに気が付いたようだった。

「あの子たちが必要としているのは何なのか、どうしてお前にわかるというんだ？」

少し落ち着きを取り戻した眞はいつもの穏やかな声で尋ねた。

「私にはわかるんです。流さん。私もその一人ですから」

「その一人って…？」

眞は満の答えに驚いて信じられないような顔でこの新米の部下を見つめた。

満はかすかに微笑むと答えた。

「はい。私は昔、チドル・コナーと呼ばれていた紅劉国の五大戦士の一人でした。あなたの娘、真津子さんは私の仲間なんです」

第二章：図書館（3）

勇希はもうどうすればよいのかわからずに、大きな机の前にある古い椅子に腰掛けていた。やっと紅劉国の本を見つけたというのに今度は灯台の地下にあるこの埃だらけの部屋に閉じ込められてしまったのだから無理もない。

勇希は今までに幾度となくこの灯台を訪れているが、つい数時間前まではこの部屋へ通じる階段があったことなどまったく知らなかった。だから、この場所を知っている人などほとんどいなくても不思議ではない。見たところ、長い間、この部屋に入った者はいそうになかった。仮にもし、誰かこの図書館のことを知っている人がいたにせよ、まさか女の子がここに閉じ込められていようなどとは思うはずもなかった。

「ああ、もう。どうしたらいいのよ」

勇希はうなだれた。

母親がいつも緊急事態のために携帯電話を持つようにと口うるさく言っていたのが思い出される。勇希はただの無駄遣いだと言って一度も携帯電話を買おうとしなかったのだ。今更になって母親の言うことを聞かなかった自分に腹がたった。

勇希はそっとため息をつくと、机の上にあった2冊の本へと視線を落とした。大きな皮のカバーがかかった本には「紅劉国之歴史」と記されていた。そしてもう一冊のほうはそれよりもだいぶ小さい。

二冊とも濃い塵がかぶっていた。勇希は息を吹きかけて埃をはらおうとしたが、逆にその舞い上がった埃で息がつまりそうになり、激しく咳き込んだ。咳がなんとかおさまると目の周りにたまった涙を拭って二つ目の小さな本を見た。

本のカバーは虹色に輝き、何の題名も記されてはいなかった。勇希はその光輝く本を手にとると、最初のページをめくった。そこには古代文字でびっしりなにか書かれている。

『２１日目、太陽神の時、私は紅鐘(こうしょう)村を父と訪れた』

勇希は続けて読み上げる。

『こんなに美しい場所はいままでに見たことがない。村はたくさんの野生の華に覆われ、人々は私たちを大変歓迎してくれた。始めて、海というものも見た。私が書物から想像していたよりもはるかに大きく、美しかった』

それは、本というよりも、昔に書かれた日記だった。勇希ははるか昔、古代人は今とはまったく違った暦を使っていたことを思い出した。人々は８月とは言わず、「太陽神の月」と呼んでいたのだ。

勇希はさっと次の数ページに目をとおしていたが、突然、その日記に記されていたある言葉に目が止まった。

『今日、カミンと名乗る青年に出会った。彼があの悪いダコスから助けてくれた。カミンは紅劉国の五大戦士の一人だった。ああ、なんて素敵な人なのかしら。彼の深い藍の瞳と甘くて力強く深い声を聞くたびに私は息が止まりそうになる。父は彼にこの紅劉国と私を護るように命令した』

日記は次の数ページの間、延々とこのカミンという名の青年のことを綴っていた。誰の目からみても、この日記の持ち主がこの青年に恋していたことははっきりしていた。

勇希は「カミン」という名を読むたびに胸の奥がチクリと痛むのを感じていた。

「私、この名前を知っている」

勇希はつぶやくと突然、夢に見るあの青年の姿が一瞬頭の中に見えたような気がした。

夢の中のあの青年もやはり深い藍色の瞳をしており、彼の深く、甘い声を聞くたびに勇希は頭がとろけそうになるのを感じていた。

「カミン…紅劉国の五大戦士の一人。この日記の少女と国を護った人」

勇希は目を閉じて、何かを懸命に思い出そうとしていた。と、急に今は失われてしまった帝国の歴史書があることに気が付く。何か、五大戦士についての記事があるかもしれない。そう思って勇希は大きな古い書物のページをめくった。

本のページをめくるたびにかびた埃のにおいが鼻をついて勇希はおもわず顔をしかめた。

その本は何千年も前に書かれたものに違いなく、置いてあった部屋は埃と外からの潮風に満たされていた。そんな最悪な環境下に置かれていたにもかかわらず、本のページはどれもわりといい状態で、どこも破れたり、虫に食われているところは見当たらなかった。

「見つけたわ！」

勇希はとうとう紅劉国の五大戦士についての長い記事を見つけた。

そこにはこう書かれていた。

『五大戦士はその命をかけて、紅劉国の皇女ナユル妃とこの国を滅ぼそうとする悪のダコスの計から護った』と。

「皇女ナユル、お姫様ですって？」

勇希はおもわず声をあげた。たしか、夢の中の青年は勇希のことを「ナユル」と呼んでいた。そのことを思い出して、勇希は自分の心臓が大きく脈打つのを聞いた。

震える手で、ページをめくる。次のページには絵が描かれていた。古い奇妙な服を着た三人の青年と三人の少女が勇希に向かって微笑んでいた。

真中の少女はきれいな、だがこざっぱりとした白いドレスに見を包み、その小さな頭上には小さな冠をかぶっている。

勇希は目を大きく見開いた。なぜなら、その少女は勇希に瓜二つだったのだ。

絵の下には六人の名前が記されていた。

『紅劉国皇女ナユル妃（前列中央）と五大戦士たち（前列右：ケラ・トーラス、後列右：クルツ・アンテス、後列中央：マホーニー・チエリッシュ、後列左：チドル・コナー、前列左：カミン・タイラー）』

「この子が皇女ナユル・・・紅劉国のお姫様。カミンという名の戦士のことをこの日記に書いたのはこの子・・・」

勇希はつぶやいた。

ふと、このお姫様の隣に立っている青年に見覚えがあることに気づいた。ハンサムな背の高い青年が涼しい藍色の瞳で優しく微笑んでいる。

「どうして、彼がここにいるの？彼は…」

言いかけたとき、突然、背後から何かの唸り声が聞こえてきた。その唸り声はあまりに大きく、勇希は部屋全体が揺れたような気がした。

ゆっくりと後ろを振り返る。勇希の震えるセピア色の瞳が彼女の座っているところからほんの数メートルのところに立つ一つの青黒い影を捉えた。

それは約１８０センチほどの高さで、その暗い影からのぞく一対の赤く光る目を勇希は見た。大きく開けられた口から長い涎が滴っている。

「なっ、なんなの、これ？」

勇希は眩暈を感じた。小さな窓から入ってきていた陽の光はすでに消えうせ、勇希を必要以上に怖がらせた。

その影はまた大きく吠えると、突然飛び上がり、勇希へと襲い掛か

った。

「誰か、助けて！」

勇希が声にならない叫び声をあげた時、突然、勇希の体が青い光に包まれ、迫りくる化け物を弾き飛ばした。

その化け物の赤い目は今、ほんの少し前まで無力な少女が古い皮製の本を読んでいた古く大きな机の前に立っている短い紺碧の髪の少年を捉えた。図書館のどこにも勇希の姿は見当たらない。

「我らの姫を傷つけると言うのなら、お前を殺す」

少年の濃い藍色の瞳が化け物の血のように赤い目を睨み付けた。化け物はまた飛び上がると、今度はその少年に狙いをさだめた。少年は一度たりとも敵の目から目をそらさず、右手のひらを化け物に向けて掲げると、一筋の青い光が少年の右手のひらから噴き出した。その光はしだいに大きくなり、少年の周りにあるすべてのものを飲み込んでいった。

＊＊＊＊＊＊

外では、今夜の寝床を探していた一人の年老いた乞食が、灯台が青い光に被われていくのを見た。ただ阿呆のように口をぽっかり開けたまま、灯台が青い光の中に消えていくのを眺めていたが突然、光は消えうせていた。静寂がもどり、古い灯台がいつもと変わりなく海のそばに立っている。

一度灯台から離れようとしていた乞食だったが、強い好奇心に押されて灯台の中を覗いてみることにした。

灯台の中は暗く、静かだった。乞食は古いくたびれた上着の内ポケットからマッチを取り出すと火を付ける。ほのかな光に照らされた空虚な空間には灯台の上へ行く粗末な鉄の階段があるだけだった。

どこにもさっき見たような不思議な光を放つようなものは見当たらない。

乞食は夢でも見たか、と頭を振ると、その灯台の中に今夜の寝床をつくり始めた。

第三章：過去の仲間（1）

真津子は突然悪寒を感じて持っていた試験管を床に落とした。と同時になつかしいオーラが助けを求めているものを感じていた。聞きなれた懐かしい声が彼女の頭の中にこだまする。

「誰か、助けて！」

若い女の声が叫ぶ。真津子が実験室の窓から外を見ると星一つない暗い闇に一筋の青い閃光が閃くのが見えた。

「この光は…！」

突然、満がドアを乱暴に開けて入ってきた。

「真津子！早く来てくれ！我らが姫が戻ってきたんだ！」

それだけ叫ぶと満は真津子の答えを待たず、もと来た道を走りさった。

「私たちの…姫が…戻って…？」

真津子は呆然と開け放たれたままのドアを暫く見ていたが、また窓の外に視線を戻した。

あの青い光はもはやどこにも見当たらない。ただいくつかのほのかな黄色い街頭の灯りだけが暗い夜の町を照らしているだけだ。真津

子ははっとすると、満のあとを追いかけた。

＊＊＊＊＊

「つまり、君はここまでどうやって辿り着いたか覚えていない、そういうんだな？」

満は流クリニックにある大きなソファに静かに座っている少女に聞いた。

その少女はうつむいてため息をつく。

「ご迷惑をかけて、ごめんなさい。一体何が起こったのか、私にもよくわからないんです。灯台の地下にある部屋に閉じ込められて、ある物を見たんです。あれがいったいなんだったのか、わかりません。気が付いたら私はお宅のソファで眠っていて」

真津子が実験室の外に出たとき、満がこの痩せた長い髪の少女を腕に抱いてクリニックに戻ってきたところだった。　少女は気を失っていたが、その腕には一冊の小さな輝く本がしっかり握りしめられていた。満は彼の仕事部屋の窓から一筋の青い閃光を見た直後にクリニックの外で気を失って倒れている彼女を見つけたのだ。

少女が悪夢から目覚めたのは次の朝だった。真津子が用意したきれ

いな着替えと暖かい朝食のおかげで、勇希は元気を取り戻し、前の晩に起こった出来事を見知らぬ二人に話して聞かせたのだった。

「ナユル…いえ、勇希ちゃんだったわよね。あなたは灯台に一人でいたの？誰か他に…男の人が…一緒じゃなかった？」

真津子は勇希の隣に腰掛けると、穏やかな紫色の瞳でこの少女を見つめた。

「男の人？なんのことを言っているのか…確かに、暗い影を見たわ。でも、あれがヒトだとはとても思えない」

「そう…」

真津子の顔が失望で曇った。

「君が見たのは、おそらく、だコスが汚いことをさせるために使うやつの配下の悪魔のうちの一人だろう」

と満は言う。

「悪魔？！」

勇希の顔が新たな恐怖でひきつった。

「ええ、あなたを灯台の地下に閉じ込めた誰かは『ダコス様があなたの死を望んでいる』と言ったんだったわね？」

真津子が聞いた。

勇希は真津子の紫色の瞳から目をそらさずにうなずく。

「そして、この日記を持っていたということは、紅劉国のこともあなたは知っている、そうね？」

真津子は大きな木製の机に歩み寄ると、一番上の引き出しの中からあの虹色に輝く本を取り出した。

勇希は驚いて真津子を見上げた。まさか、またあの本を目にするとは思っていなかったのである。またあの本を見ることがなければ、昨夜の出来事はただの悪い夢と思うこともできただろう。だが今、彼女が灯台の地下で見つけたその本は真津子の白く、長い指をした手の中で虹色に輝いている。

「どこで、それを見つけたの？」

勇希は必死で自分自身を落ち着かせようとしたが、その気持ちとは裏腹に、彼女の声は震えていた。

「このクリニックのすぐ外で、君とこの本を見つけたんだ」

答えたのは満だった。

「そう…じゃあ、もう一つの本は？」

勇希が顔を上げると満の男らしい陽に焼けた顔を見た。

「もう一冊？」

満は眉をしかめる。

「他には何も見なかったが」

「そう…ですか」

勇希は失望してまた瞳を落とした。とうとう長年捜し求めていた本が見つかったはずだった。それなのに中をほとんど読むこともないまま、失してしまったのだ。

「紅劉国のことは、少しなら、知っています。十三歳の頃からずっと失われた帝国のことを勉強してきましたから。でも、ほとんど知らなくて。昨日、古くて大きな皮張りの本を見つけたんです。この虹色に輝く日記帳と一緒に。とうとう失われた帝国の謎を教えてくれる本が見つかったと思ったのに、また失しちゃうなんて…」

勇希はふっとため息をついた。

真津子は満を見、声に出さずに問いかける。満は穏やかに微笑むと、その問いに答えるようにうなずいた。

「勇希、私たちのほうが、あなたより少しは失われた帝国のことを知っている、と思うわ。知りたい？」

第三章：過去の仲間（2）

真津子は再びソファに戻ってくると、虹色に輝く日記帳を手に腰をかけた。

勇希ははっと顔をあげたが、なんと言っていいのかわからず、また俯く。

長い沈黙の後、口を開いたのは勇希だった。

「あなたたちも失われた帝国の研究を？」

真津子は微笑むと静かにうなずいた。

「私たちの研究によると、ダコス様とはもともと王に助言する者として使えた神官だったらしいわ。でも、彼の野望が彼を悪の邪教へと導いて。結果、王は彼を宮廷から追放してしまったの。そして、ダコスは紅劉国から出なければならなくなった。国外へ出てからも、彼の野望と国王への憎悪は増大し、とうとうあの忌まわしい残虐非道な戦争の発端を作ってしまった」

真津子の瞳はまるで過去の出来事を思い出すかのように遠くを見つめていた。

「そんなことが、あったの。ダコスという名の男が世界を滅亡させた」

勇希は捜し求めていた答えの糸口を見つけはじめた。

「でも、もし彼が帝国を滅ぼしたのなら、彼の望みは叶えられたんでしょう？第一、帝国が滅亡したのは三千年も前のはず。そんな昔に生きていた人間がどうやって今の世界にいるというの？それとも、他にダコスという名の男が私の命を狙っている？」

勇希は誰にともなく問い掛けた。

「帝国はダコスによって滅亡させられたわけじゃない。少なくとも、完全に滅亡したのは」

満は少しの間、どの言葉を使えばいいのかためらったが、やがて、勇希のセピア色の瞳を真正面から見つめると、言葉を続けた。

「紅劉国を滅ぼしたのは奴じゃない。紅劉国の五大戦士が奴の計から護ったんだ。数人の戦士がダコスの手先によって殺された。だが、カミンが、五大戦士の中でも最も偉大な戦士が、やつをすんでのところで破ったんだ。少なくとも、俺はそう聞いている」

「たぶん、もしダコスが邪教を使っていたのだとしたら、この世界に復活する術を見つけていた可能性は十分あるわ」

真津子は言いながら、日記帳の表紙を開いた。

「もし…もしも、あなたが言うことが本当に起こって、ダコスがこの世界に復活したとしても、それでどうして私が狙われなきゃいけないの？一体何が目的なの？」

勇希はヒステリックに叫んだが、勇希の問いに答えられるものは誰

もいなかった。

長い沈黙が部屋を満たしていく。

最初に沈黙を破ったのは、真津子だった。

「本当に、あなたを灯台に閉じ込めた誰か以外は、誰も見なかったのね？」

勇希は首を振る。

「私を閉じ込めた人さえ見ていないわ」

「じゃあ、光はどうだ？青い光を見なかったか？」

次に質問したのは満だった。だが、答えは同じだった。

勇希は誰も見ていないし、不思議な光も見てはいない。ただ、血のような赤い目を持つ影を見ただけだ、と。

三人は何をすればいいのか、また何を言えばいいのかもわからずふっとため息をついた。

「家に電話をかけたほうがいいかもね、勇希ちゃん。ご両親が心配しているわ」

真津子は勇希が誰にも聞かれないところで電話がかけられるように、勇希を満の勉強部屋に連れて行った。

「さ、この部屋の電話を使いなさい。終わったら教えてね。その後、私たちが家まで送っていってあげるわ」

勇希は真津子の親切に感謝した。

「いいえ、どういたしま…」

言いかけて、真津子は一瞬息を呑んだ。彼女の紫色の瞳はまるで幽霊かなにかをみたかのように大きく見開かれている。真津子の紫色の瞳は勇希のセピア色の瞳が一瞬、濃い藍色の瞳に変わったのを捕らえていた。

「流、さん？」

勇希は真津子の顔からいきなり血の気が引いていくのに気が付いた。

「大丈夫ですか？」

勇希は心配そうに声をかける。

瞬時にショックから立ち直った真津子は勇希の柔らかなセピア色の瞳に青白い顔の自分が映っているのに気が付いた。

「え、ええ、なんでもないわ。なんでも…と、とにかく、終わったら教えてね」

真津子は言うと、急いで部屋のドアを閉めると満の待つ部屋へと早足で戻っていった。

＊＊＊＊＊

「それで、奈波勇希は逃げた、と言うのだな」

暗い部屋の中、低いハスキーボイスが静かに尋ねた。

真っ赤に燃え立つ暖炉の前には大きな長椅子とコーヒーテーブルがひっそりとならんでいる。電気の代わりに灯された数本の蝋燭の青白い炎が暗闇の中、亜麻色の男の瞳をかすかに浮かび上がらせていた。

「はい。部下によると、我々が送り込んだ刺客は不思議な青い光の中、女とともに消えてしまったと…」

女の声が答える。

「まったく、僕がなんのためにあいつを閉じ込めたと思ってるんだ？お前の刺客など役立たずではないか」

まだ幼い声をした少年が舌打ちした。

「まあ、落ち着け。逃げた、というのならまあそれもいいだろう。」

ハスキーボイスが少年をなだめる。

「どうしてですか？あの女を殺すこと、それが俺たちが受けた使命の筈？あそこに閉じ込めるなんてせずに僕があの場で殺していればよかったんだ。自分の仕事も果たせないようなくだらない刺客など

送り込んで何になる？」

少年の声は苛立ちを隠せない様子だった。

「ラナ、まあ、そう苛立つな。お前は立派にこの鍵を私のもとに届けてくれたのだ。もともとこの鍵さえ手に入れば計画が遂行できると考えていたのはこの私だ。だが、それは間違いだったらしい。どうやらこの鍵を持ってしても私一人で門を開くことはできないらしい。あの女の力なしでは…」

男の亜麻色の瞳が妖しく輝いた。

「あの女を連れて来い」

「必ず…奈波勇希、待っていろ…」

少年の凍て付くような青い瞳の中、冷たく光る青白い炎が静かに揺れていた。

＊＊＊＊＊

「すぐにでも勇希が閉じ込められたという灯台に行かないと。カミンと他のみんなも見つけなければ。理由はどうであれ、ダコスはなんとかして復活を遂げている。何か善からぬことを企んでね」

満にたった今見たことを話した真津子は息せき切ってつづけた。

「灯台で勇希を救ったのはカミンに違いないわ。昨夜私たちが見た青い光はカミンの気弾としか思えないもの」

「ああ、あの光を見た時、俺は確かにカミンの気を感じた。だが、もしやつがあそこにいたのなら、どうしてやつは俺たちの前に姿を現さないんだ？もしやつが能力をまだ失っていないとしたら、俺たちのことを覚えていてもおかしくはないだろう？」

満は開け放たれた窓の外に目をやった。外はとてもいい天気で果てしなく続く青い空には一筋の雲さえ見当たらない。

「本当に勇希がナユルだと思う？」

真津子はためらいがちに満にそう尋ねた。満は振り返るとかつての仲間が発した問いに心底驚いた様子で真津子の顔をじっと凝視する。

「彼女は間違いなく、俺たちが忠誠を誓った皇女ナユルだ。お前にも彼女の気はわかる筈だ」

満はゆっくりと、自信に満ちた声で答えた。

「そうね。だけど…。もし、そうだとしたら、私がたった今見たものは何だったの？勇希の瞳の色が変わるのを確かに見たのよ。あれは絶対彼女の瞳の色じゃなかった。それにどうやって鍵のかかった地下室から抜け出したっていうの？それにダコスが送ったに違いない黒い影もいたのよ？それだけじゃない、彼女から感じた気は…」

何か言いかけていた真津子はそこまで言って口を閉じた。

「何だ？」

満は困惑した顔で真津子を見つめる。

「お電話ありがとうございました～。」

真津子が何か言う前に勇希が部屋の外から声をかけた。

「え～っと、彼女を家まで送っていってくれる？」

「お前は一緒に来ないのか？」

４ｘ４の鍵を持った満が声をかける。

真津子は首を横に振ると自分もバッグを持った。満の側に行くと満にしか聞こえないよう、小声で耳打ちすると満は静かにうなずいて後ろ手にドアをしめた。

第四章：五大戦士（1）

勇希が紅劉国のことやダコスという名の者が彼女を亡き者にしようと企んでいることを知ったあの日、満が勇希を家に送ったあの日からすでに一ヶ月が過ぎていた。あの日、真津子は一人、どこか行くところがあるからと言って出て行ったがどこに行くのか勇希には教えてくれなかった。あとで連絡すると言っていた真津子からなんの連絡もないままただ月日だけがいつものように過ぎていく。

勇希は母親から手渡された翌日に大切な鍵を無くしてしまったことを悔やんでいたが彼女の生活は何一つ変わることなく、あの晩以来変わったことに遭遇することもなかった。大学の勉強で以前と変わりなく忙しい毎日を過ごしているうちに家に持ち帰ってきたあの光り輝く日記帳のことすらすっかり忘れてしまっていた。

時はもう十月で、勇希の大学も他の大学と変わりなく、この時期は毎年学園祭を開くことになっていた。勇希やつくも、敬介は「Ｔｈｅ Ｍｉｘｅｒ」というバンドに所属しており、今年の学園祭ではミニコンサートを開くことにしていた。バンドのメンバーは合計五人。各々が違う楽器を演奏する。勇希はサックス、敬介はギター、そしてつくもはフルートである。光という名の青年はトランペットを、その双子の弟である宏樹はドラムを演奏する。それぞれ全く別の楽器を弾いているのだが、五つの異なった楽器がみごとに調和して新感覚の音楽を作り出し、いつの間にか勇希たちの大学ではちょっとした有名バンドになっていた。そこに目をつけた大学側が学園際でミニコンサートをすれば大学での評価点を特別もらえる、と持ちかけたのである。勇希と他の四人のメンバーは向こう二週間の間、

昼夜となく練習し、すべてが順調に運んでいた。

ところが、いいことは長くは続かないのが世の常である。バンドリーダーの敬介が学園祭の前の晩、立ちの悪い流感にかかってしまったのだ。勇希と残りの三人はコンサート開始１２時間前、急遽コンサートの内容を変えなければならなかった。敬介のパートが必要ないよう曲を夜遅くまでかかって急遽アレンジしなおしたが、ありあわせで作った音は納得のいくものではなかった。バンドのメンバーの誰もが約束されていた評価点がうら寒い神無月の空に消えていくのを感じていた。

＊＊＊＊

翌日、学園際は予定通り始まった。「Ｔｈｅ　Ｍｉｘｅｒ」がコンサート用に用意した小さなホールはたくさんの人で埋め尽くされていた。勇希と他の三人はステージにあがる前から会場の熱気を感じていた。

「もう、ここまで来たら後戻りできないわ。とりあえずやれるだけのことをやってみましょう」

勇希はそう仲間に言うとステージへと踊り出た。

一曲目、誰も間違えることはなく、わりといい曲調に仕上がっていた。実際、勇希たちのバンドは今までになくいい音を奏で、その証拠に観客たちはまだ一曲目だというのにすでに椅子から立ち上がる

とリズムにあわせて踊り始めた。

勇希と三人のメンバーはこんなに大勢の前で演奏したことは今までなく、それがなんて素敵なことなのだろうと今更ながらに感じていた。楽しい時はあっという間にすぎ、会場の誰もがこのまま何事もなく、コンサートは大成功に収まるだろうと予感していた。だが、そんな皆の気持ちとはうらはらに何かが闇でうごめいていた。三曲目は勇希のソロ曲で甘く切ない曲に皆が酔っている頃、事件は起こった。

「勇希！あぶない！」

勇希の隣にいたつくもが突然叫び声をあげたかと思うと、その瞬間勇希の前に踊り出た。

勇希にはつくもの前に背の高い黒い影だけが見えた。観客はいったい何が起こったのかわからず、ただ静かにその場に立ち尽くしている。なかにはもっとよく見ようと椅子の上に立っている者もいた。たぶん、これも余興の一部だと思っているのだろう。

勇希が少しだけ体を右へずらすと、その黒い影がただつくもの前に立ち尽くしているのではなく、妖しく光る、大きな刃物で切りかかっていることに気がついた。

つくもは自分のフルートを使って敵の武器をくい止めていたのだった。つくもは奥歯をぐっと噛みしめてなんとか力を押しとどめているが、影の存在はつくもよりずっと大きく、つくもが力で対抗できないことなどは誰の目にも明らかだった。このままではつくもに勝算はない。

「き…さ…まあ…！！」

つくもが食い縛った歯の隙間から絞るようなうなり声をあげる。

まるで他人がしゃべっているようで、勇希が知っているいつもの彼女の声とは違っていた。

「やあああああ！」

つくもは叫び声とともにフルートで襲い掛かっていた影をステージ上から突き落とした。影の力から開放されたつくもはフルートを左手に持ち帰ると、まるで武器であるかのごとく身構え、ステージから客席へと転げ落ちたその影を射抜くかのような視線で睨み付ける。影はすぐさま床から立ち上がると、今度は中空へと浮かび上がった。

「勇希、逃げて！ここから離れるのよ！」

つくもが勇希に向かって叫んだが、勇希は一寸たりとも動くことができないでいた。いや、動けないと言うのは正確ではない。勇希は自分の意識が何か外からの力で呪縛され、自分を自分自身の力でコントロールできないことを感じていた。

その間にも、影は益々大きく膨れ上がり、勇希の藍色の瞳は、その血のように赤黒く光る一対の目を暗闇の中に捕らえていた。

「あんた、一体？」

つくもの声は動揺を隠せない。

突然、影がつくもに向かって動いた。つくもがはっと身構えた時に

は敵の大きな刃物がつくもの右腕にくいこみ、真っ赤な鮮血が滴り落ちた。

つくもの腕にくいこんだ刃を見た観客はやっとこれは余興の一部でも何でもないことに気付いたらしく、前側に座っていた少女たちの切り裂くような悲鳴が会場に木霊した。そして、2人のバンドメンバーを含む人々は我先にと会場から逃げ出していった。

つくもは自分に襲い掛かったその影を苦々しく睨み返すと銀色に光るフルートを握る手に力をこめた。

今度は自分から影に襲い掛かろうと身構えたその時、強い風が会場の中へと吹き込んで朦朧としていた勇希の意識を引き戻した。我に返った勇希のセピア色の瞳は黒い影の後ろに立つ背の高い大きな男の姿をとらえた。

「満さん！」

勇希が叫ぶ。

満はいまや空っぽになった客席の中、長い刀を手に佇んでいた。満は何も言わずにその刀をつくもへ向かって投げた。瞬間、つくもは持っていたフルートを投げ捨てると、その左手に輝く刀を受け取った。と、突然つくもは落ち着きを取り戻したようで、影に向かってにやりと微笑む。

「さ〜て、懐かしい仲間も手に入ったようだ。これでもまだ、俺とやり合うっていうのかい？」

勇希には影の表情など見て取れるはずもなかったが、少しだけ、次

の手を出しあぐねているかのようにその赤い目に陰りが差したような気がした。

「死にたくないのなら、撤退したほうが身のためだ。帰って、お前のご主人様に伝えな。貴様は俺たちのお姫様を手にいれることはできない。なぜなら、今度は俺が護っているのだから」

つくもが言うと、影は小さなうめき声で答えた。

「かつて我々はお前たちを滅ぼしたのだ。今度も必ず…覚えておけ」

形のない口から低くおぞましい声を絞り出すようにしてそう言うと、その影は勇希たちの目の前から消えうせていた。

第四章：五大戦士（2）

その夜、つくもは流クリニックに泊まることにした。腕の傷は深かったが命に別状があるわけではない。だが、真津子と満から話を聞いて、自分の家に帰れるような気分ではなかったのだ。

会場からあの黒い影が消えた後、勇希はつくもを学校の保健室へと連れていくと手早く腕の傷を手当てした。つくものフルートはあの戦いの中、真二つに折れなかったのが不思議なほどひどい有様になっていた。もし、満が来る前にフルートが折れてしまっていたとしたら、おそらくつくもは命を失っていただろう。

満はつくもがもしや昔のことを覚えているのではないかと期待したがつくもは何も覚えていなかった。それどころか、少し前に突然自分たちに襲い掛かってきた敵に何と言ったのかすら覚えていない様子だった。

つくもが咄嗟に剣を使ったことで前世の記憶を持っているのでは、と思った満だったが、それはつくもの父が剣道の師範であり、つくも自信、一級の腕前だという。だが、満が不信に思ったことがもう一つある。それは、つくもが右利きだということだ。もしかしたら、剣を使う時だけ左利きなのかもしれない、そう思い聞いてみたがすべてにおいて右利きだと言うのだ。

満はつくもがかつての仲間、クルツ・アンテスではないかと考えていた。なぜなら、彼女も左利きの女剣士だったからだ。実際、満がつくもに手渡した剣はその昔、クルツが使っていたものだった。

つくもがあの剣を手にした時もやはり左利きで、黒い影に対して発した言葉はよもや昔のあの出来事を知っているかのような口ぶりだった。もし勇希か敬介がいれば、つくものしゃべり方があの剣を持った途端、急に変わったということにも気付いたのであろうが、まだつくもをよく知らない満には知る由もなかった。

流クリニックにつくもを連れて帰り、真津子と二人で彼女と勇希の身に一体なにが起こったのかを話して聞かせたのだ。勇希も一緒に行きたがったが、満は近いうちに連絡するから、と言ってつくもだけクリニックに連れてきた。

「まず、最初につくもが本当にクルツの生まれ変わりなのかを確かめなければ。もし、仮にそうだとしても、昔のことを思い出してもらわなければ意味がない。ダコスは確実に何かよからぬことを企んでいる。今の勇希に必要なのは我々の過去を知り、彼女をいつも危険から護ってくれる者。それがこの安東つくもなのかはっきりしない限り、誤った情報を勇希に吹き込むことはできない」

というのが満の考えだったからだ。

今のつくもは前世の記憶など何も持ち合わせていない。だが、彼女の記憶は彼女の心の奥底に眠っているだけなのだ。そしてその記憶を蘇らせることができるのは…満は思う。

真津子が、彼女の能力なら、つくもの能力と記憶を取り戻すことができるはずだ、と。

そのことを告げた時、真津子は案の定、その美しい顔を曇らせた。

「私に彼女の心を読めと言うの？」

真津子にはいろいろな能力があり、他人の無意識の世界を覗くことができるのもそのうちの一つだった。現世では毎日の訓練のかいあって、見たものをコンピューターのモニターに、まるでビデオにでもとったかのように、その映像を映し出すことまでできるようになっていた。

だが、何よりも礼儀を重んじる真津子にとってそんな能力は邪魔で劣悪非道以外の何者でもなかったのだ。

「だが、それ以外、今の俺たちには方法がない。幸い、つくもも賛成してくれている。あいつも自分の前世の記憶を取り戻したいと言っているし、第一、記憶をなくしたままでは、これから先やってくるであろう敵とやりあうことなど不可能ではないか」

満は珍しく熱く自分の考えを口にした。

満の側に立っていたつくもも真津子にうなずいてみせる。クリニックに向かう途中、必要なことは満がつくもに話していた。

もちろん、全てを信じたわけではない。だが、今日はじめて手にしたはずのこの剣がなぜかなつかしく感じる気持ちを否定することはできなかった。それに、つくもが五大戦士の生まれ変わりであろうとなかろうと、何者かがつくもと共に勇希を傷つけようとしたのは紛れもない事実である。もし、またなにかが襲ってきた時のためにも、できるだけ状況を把握して次の決戦に備えておくほうが無難というものである。

「流さん、私なら、大丈夫。過去にいったい何があったのか、そしてこれから何が起ころうとしているのか、私に教えてくれるでしょ

？ただ何もしないで誰かが殺しに来るのを待つなんて性分じゃないんだ」

そう言ったつくもの顔を長い間見ていた真津子だったが、しばらくすると決意をした様子で、必要な機材などを準備すると、真津子はつくもの過去をクリニックにあったモニターに映しはじめた。

＊＊＊＊

「結局、お前はあの娘を殺すのに失敗した、そう言うんだな？」

子供っぽい声が暗く冷たい廊下に響き渡る。

「手を尽くしたのですが、申し訳ございません。しかし、どこからともなくある男が現れたかと思うと、例の剣をあの者に渡したもので…」

黒い影が震える声で言い訳した。

「この役立たずが！」

少年は大声で怒鳴りたて、黒い影は恐怖にその形のない体を震わせた。少年の氷のように褪めた青い瞳が怒りに燃えている。

その幼い子供のような声に反するかのような褪めた青色の瞳は避けようもない冷気を放ち、大男でさえも無力な子猫のように黙らせる、そんな雰囲気を秘めていた。

「僕はお前にあの娘を捕えてくるようにと言ったんだよ。邪魔立てする者がいた時は、誰であろうと殺して構わない、必ず奈波勇希を連れて来いって。それが僕がお前に与えた使命のはず。それがなんだ、剣を持った小娘ごときに怖気づいて命惜しさに逃げ帰ってきたって？なんとか言え！」

怒りで真っ赤になった男の顔は益々幼くみえた。

「し、しかし、あれはただの剣などではありません。あれは例の、五大戦士の一人が持っていた代物」

黒い影は情けなく答える。

「例の剣だと？まさか、クルツ、あの女剣士が生きている、というのか？そしてやつらの姫を護ったと？」

突然、三つ目の影が闇の中で声をあげた。

「う～む。それはなかなか面白いではないか。カミンはどうだ？奴を見かけなかったか？」

低いハスキーボイスが静かに聞く。

「いいえ、カミンの姿は今回どこにも見当たりませんでした」

「そうか、しかし、これからはもう少し慎重に動いたほうがよさそうだ。もし、クルツが生きているのだとしたら、他の者たちもどこかに生きている可能性がある」

三つ目の影が動くと絹のような月の光が長い金髪の下に光るダコスの亜麻色の瞳を照らし出した。

「ダコス様？それは一体どういう意味で？」

今、若い男にも上司の緊張が伝わってきたらしかった。

「お前にはもう一度、チャンスを与える。次は失敗せぬことだな。もししくじったら…わかっているな？」

青年の褪めた青色の瞳が長い緑色の髪の下で冷ややかな光を放った。

「御意」

「また後で呼ぶ。それまで待機しろ。ラナ、お前は少し残ってくれ。話がある」

ダコスがそういうと、影はすぐに消えうせ、代わりに若い女性がどこからともなく現れた。その女はセクシーな赤いチャイナドレスに身を包み、ラナと呼ばれた青年を挑戦的にその燃えるような赤い瞳で見つめた。

「なんだよ、セラか」

ラナはセラをまるで汚いネズミでもみるかのように一瞥した。

「あら、ご挨拶ね。せっかく最初の失敗をお祝いして差し上げようと思っていましたのに」

セラの嫌味を無視しその場を離れようとする青年を制したのはダコ

スだった。

「ラナ、どこへ行く。話があると言ったはずだ」

ダコスは続ける。

「これからは、セラと働いてもらう。」

「な、なんだって?!冗談だろ、ダコス!なんだって僕がこんなやつと一緒に働かなきゃいけないんだ!」

ラナは怒りで顔を真っ赤にして反論した。

だが、ダコスはそんなラナの気持ちなどおかまいなしで、いつものように静かな落ち着いた声で続けた。

「ラナ、お前はまだ何もわかっていない。お前は現世で我々の仲間となったもの。我々と五大戦士との間に昔、何があったのか…それをお前は知らないのだ。奴らは…五大戦士の力はとても強大。もし奴らが現世に生きている、というのなら、奴らが能力(ちから)を合わせ、我らに再び刃向かってくるのは免れまい。だが、邪魔だてさせるわけにはいかぬ。幸い、セラは奴らのことを大変良く知っている。なにせ、我が紅劉国の伯爵…神官だった頃から我に仕えているのだからな。よいか、二人で力を合わせ、あの女を連れてくるのだ。今後、セラに相談なく、勝手な行動をとることはならん。わかったな?」

ダコスの声こそ静かで穏やかなものだったが、ダコスの命に逆らえば最後、自分の命がないことをラナはよく心得ていた。そんなラナには為す術もなく、ただ、その命を聞くしかなかった。

第五章：最後の五大戦士（1）

満が傷ついたつくもを流クリニックに連れて帰った後、勇希は自分の家に帰ると、まるで呆けてしまったかのような面持ちで、長い間自分の部屋に閉じこもっていた。

勇希もつくも達と一緒に行きたいと言ったのだが、満はそんな勇希の気持ちを知ってか知らずか、あとで連絡するから、とだけ言ってつくもと立ち去ってしまったのだ。勇希は自分のベッドの上に横になると病院のように白い天井をじっと見つめていた。

灯台でなにか影のようなものに始めて襲われてから一ヶ月。もちろん、あの出来事や失われた鍵のことを忘れてしまっていたわけではない。だが、まさか、彼女の命を狙った誰か、いや、何かが自分の友達にまで手を出そうとは思ってもいなかったのである。

つくもは決して仲のよい友達、とは言えなかった。いつも競争心丸出しで勇希にくってかかっていたつくもにほとほと愛想がつきることもしばしばだった。それでもなお、つくもが勇希の命を救ったのは事実だ。

「なんであんなこと…」

勇希は自問自答し始めていた。

「私のために、あんな怪我まで負って…どうして自分の命を危険にさらしてまで、あんなに嫌っていたはずの私を助けてくれたの？」

真っ白な天井が目に溜まった涙のせいでぼやけていく。勇希は下唇をかむと、壁のほうに寝返りをうった。

つくもが自分の身を呈して危険に立ち向かった時、勇希はぴくりとも自分の体を動かすことができなかった。ただその場にばかのように立ち尽くして、自分の友達が邪悪な影に傷つけられるのを見ているしかなかったのである。その影の本当の目的はつくもではなく、勇希であったのに。

勇希は音もたてず、静かに泣き崩れた。涙が勇希のセピア色の瞳から止め処もなく溢れ出て、血色のいい薔薇色の頬を濡らしていく。

「泣かないで」突然、背後から懐かしい声が聞こえてきた。

勇希はゆっくりと体を起こすと周りを見渡したが部屋にはやはり自分のほかに誰もいなかった。

「今の声…」

何か言いかけたとき、机の上の何かが青く優しい光に被われているのに気が付く。それはあの灯台で、勇希が見つけた日記帳だった。

勇希はティッシュで涙を拭うと日記帳と向き合うように椅子に座った。勇希がそっと日記帳に手をかけると、その青い光は忽然と消えてしまった。

少しだけためらった後、日記の表紙をめくってみた。何ページかめくってみるが、何も書かれていない。

「？」

勇希があの灯台の地下に閉じ込められた時は長々とカミンという青年のことが確かにこの日記帳には書かれていた。それが今はそっくり消えてしまっている。それだけではない、どんなにページをめくってみても、何一つ、記述されてはいなかったのだ。

「一体これはどういうことなの？」

勇希は軽い眩暈を覚える。彼女の心臓は勇希の体から逃げ出そうとでも言わんばかりに早く脈打っていた。

日記を閉じると、自分の胸に当てて、呼吸を整える。目をつぶってしばらくじっとしていると、少しずつ、落ち着きを取り戻してきた。

心臓がいつものように規則正しいリズムで動き出したことを確認すると、そっと目を開けて同時に日記の中央を開いた。すると突然、青い光が日記帳の中から部屋に差し込んでそれと同時に一種のホログラムがまっさらなページから飛び出してくるのが見えた。

始めはぼんやりと影だけが、そして叙叙に一人の青年の姿が現れた。一対の藍色の瞳が彼の青く長い前髪の下で勇希を見つめている。その青年は勇希が長い間ずっと夢に見てきたその人そのものだった。勇希は夢とはまた違った場所でこの青年の顔を知っていた。

そう、あの灯台の地下室で勇希が見つけたもう一つの古い歴史書、その中に彼がいた。青年の名はカミン・タイラー、紅劉国五大戦士の一人である。カミンは優しく微笑んで、驚く勇希に話し掛けた。

「お願いだから、もう泣かないで」

カミンは穏やかな甘い声で静かにささやいた。

勇希は自分が泣いていたことを本当にカミンが知っていたのかと思ったが、彼女がなにか言う前にカミンは続けた。

「何があろうと、いつでも俺が護ってやる。だからナユル、もう泣かないで」

勇希はこのホログラムはきっとナユルの思い出を記録したものなのだ、と理解した。きっと二人がまだ生きていた頃に、カミンがナユルに言った言葉なのだろう。それをこの日記がまるでビデオかなにかのように映像として記録していて、今、勇希に見せているというわけなのだ。

その証拠に、勇希はカミンの藍色の瞳の中に映る白くこざっぱりとしたドレスに身を包んだナユルの姿に気が付いた。彼の瞳の中のナユルはなぜかとても悲しそうな表情をしている。カミンは目を閉じると、まるで自分の中の何かをふるい落とすかのように静かに首を振った。再びカミンが目を開けたとき、勇希にはその息を呑むほどきれいなカミンの瞳の中に、ナユルへの愛情だけがはっきりと見てとれた。

「ナユル、俺も君と離れたくない。だが、普通の男である前に、俺は五大戦士の一人でもある。俺は君の、ナユルの守護者であり、そして、この国に使えている者。俺が俺である限り、俺は君とは一緒になれないんだ」

カミンはそこで言葉を切ると、その瞳にはこのうえない痛みと悲しみが浮かんでいた。カミンは深く息を吸うと、勇希が今まで誰にも

みたことのないような最高の笑みを浮かべてみせた。

「でも、これだけは忘れないでほしい。俺はいつでも君の側にいる。俺の命にかえてでも、俺は君を必ず護ってやる。俺の一生を君を護るために捧げよう。君は俺の命なんだ」

勇希は自分の顔が赤くなるのを感じて、きっとナユルも同じ気持ちだったのだろうと思った。

と、突然、笑みがカミンの顔から消えた。　代わりに、カミンの目が警戒して鋭い光を放つ。

「勇希」

カミンが呼んだ名はいまや勇希のものだった。

勇希が驚いていると、カミンは低い警戒した声で続けた。

「勇希、ここから離れるんだ」

勇希はいったいなにがおこっているのか状況を把握できないでいた。そうする間にも、カミンの表情は硬くなり、ついには大声でこういった。

「勇希、急げ、窓から離れるんだ！」

カミンが言い終わるか終わらないうちに、目の前にある窓の外で何か黒い影が動いたのに勇希も気がついた。勇希が気配にゆっくりと顔を上げる。彼女のセピア色の瞳は大きく見開かれ、まるで誰かが顔に冷たい空気を吹き付けたかのように目の前の光景に凍りついた。

勇希の目の前で、その大きな暗い影はキングコングの従兄弟のような真っ赤な毛に覆われたモンスターに変わっていった。それは巨体にもかかわらず、二階の窓の外にふわふわと浮いていたのだ。その汚い黄色の目が勇希を捕らえると、大きく開いた口から真っ黒な尖った歯が覗いていた。

カミンのさけび声が勇希の頭の中で、早く逃げるようにこだましていたが、勇希は腰が抜けたかのように、その場から動けないでいた。真っ赤なキングコングは激しく吠えると、その巨体には似つかない素早い身のこなしで窓へと向かって動いた。窓はこなごなに砕け散り、勇希の恐怖の叫びが冷たい星のない夜に響きわたっていた。

第五章：最後の五大戦士（2）

敬介は勇希の家へ向かってバイクを走らせていた。つくもからの電話でほんの十分ほど前にその日大学で何が起こっていたのかを聞かされたばかりだった。まだ腹の具合がよくなかったのだが、そんなことを聞かされて、ただ自分のアパートで座っているなんてことができる性分ではない。

敬介は流クリニックにいるつくもの所に行くつもりだったが、つくもが先に勇希のところに行くように促した。何かよくないことが起こる気がすると言うのだ。だから、敬介に勇希が無事かどうか確かめてほしい、とつくもは言った。つくもが勇希のことをこんなに心配するのは珍しいことだったので敬介も言われた通り勇希の家に行ってみることにしたのだ。

次の角を曲がればもう勇希の家はすぐそこ、という所になって、敬介は女の切り裂くような悲鳴を耳にした。

「勇希？！」

敬介は勇希の家の前にバイクを止めると、彼女の部屋のある二階を見上げた。家の中に灯りは見えず、まるで誰もいないかのように静かにひっそりと佇んでいる。チャイムを押そうと一歩玄関へ足を踏み入れた時、敬介は足元でなにか固いものが踏み潰されたような音を聞いた。外套の灯りの中、目を凝らしてみると、足元に散乱した無数のガラスの破片を踏んでいる自分に気がついた。

「勇希！」

叫びながらチャイムを何度となく押してみたが誰も出てくる気配はない。ノブに手をかけてみたが、鍵がかかっているようでびくともしなかった。

「勇希はいないのか？」

敬介は首をひねったが、少し前から感じている胸騒ぎを拭い取ることはできなかった。何かがおかしい、敬介の直感が赤信号を警告していた。辺りは静寂につつまれ、敬介が大声で叫んでいるにもかかわらず、近所の住人が何事かと窓から覗き込んだり、うるさいと注意する様子もない。まるで自分以外には誰も存在していないような、そんな奇妙な感覚におそわれた敬介は、自分の想像にぶるっと身震いした。

その時、頭上でなにかがぶつかったような鈍い音がした。敬介は暫く躊躇していたが、意を決したように少し後ろへあとずさると、玄関のドアへと体当たりし始めた。　三度目の正直、というのだろうか、体当たりして三度目にドアの鍵がこわれたのか、敬介はドアとともに玄関の踊り場に倒れこんだ。

「あいててて…マジ、いて～な」

敬介はドアに強く打ち付けた左肩をさすっていると、二階からなにか野生の獣のような低いうめき声が聞こえてきた。敬介は急いで立ち上がると、靴を脱ぐのも忘れて階段を駆け上っていった。

「勇希！」

思い切り部屋のドアを開けると、敬介はそのままその場に硬直した。昔、古い映画で見た「キングコング」を思わせるような大きなけむくじゃらの猿がそこには立っていた。ただ映画の猛獣と違ったのは、目の前にいる猿は体中、真っ赤な毛で覆われていることだった。

真っ赤な毛むくじゃらのキングコングの下では敬介より少し幼い感じのする、紺碧の髪の青年が、そのモンスターを自分の体から引き離そうと必死に抵抗している姿が見える。だが、モンスターはその巨体に違わず相当な怪力らしく、その大きな手のひらは青年の白く細い首をやすやすとつかみあげている。

「！！」

青年は声にならない声をあげ、なんとかモンスターの手から逃れようともがいた。青年の顔からみるみる血の気が引いていき、その端整な顔が苦痛でゆがんでいる。とうとう青年の体は後ろへと倒れこみ、モンスターの巨体が痩せた、だがしっかりと均整のとれた青年の体にのしかかっていった。

敬介は目の前の驚くべき光景に、ただ何もできずに立ち尽くしていた。その時、敬介は誰かが自分ことを呼んでいるのに気が付いた。そして、モンスターに羽交い絞めにされている青年の藍色の瞳がじっと自分を見ていることにも。

敬介ははっとした。その青年をどこかで見たことがある、そんな気がしたのだ。まさに青年が目の前で殺されそうになっているというのに、敬介はのんびりと一体どこで知っているのか、そんなことを考えていた。その間、青年は残りの全ての力を振り絞り、モンスターの手を一度は自分の首から離すことに成功したが、またすぐに首

をつかまれ、どんどん青年の首をしめていく。

「ケラ・・・」

モンスターの圧倒的な力の下で青年は搾り出すような声を出した。

「ケ…ラ…。勇希…を…すけ…ろ。お…れたちの…姫、を…たす…け…」

その声を聞いて突然、何かが敬介の頭の中に閃いた。自分で何をしようとしているのかわからないままに、敬介は自分の両手のひらを自分の胸の前にかかげると、金色に光る電気が手のひらの間でみるみるうちに野球のボールぐらいの大きさの玉になっていく。

「仲間から離れやがれ、この醜いサルめ！」

敬介は叫ぶと青い髪の青年の上にのしかかっていたモンスター目掛けてその玉を左手でなげつけた。電気の玉は直接赤毛のキングコングにヒットした。モンスターは一瞬苦痛にうめき声をあげたかと思うと、あっという間に敬介の目の前から消えうせていた。敬介は突然のことに自分の手のひらを見つめて自分がしたことに驚いていた。

「な、何なんだ…今、俺ってば、何しでかしたんだあ？」

すっとんきょうな声をあげると、何度となく自分の手をひっくり返して眺めてみたが、どこにも変わったところは見当たらない。とうとう気でも狂ったか、と自分の頭をぽりぽり掻いていたが、今まで首を締められて死にそうになっていたかわいそうな青年のことを思い出すと、床に倒れている青年のほうへ走りよっていった。

「おい、あんた、大丈夫か？」

倒れて意識のない青年の側にひざをついてそういいながら顔を覗きこんだ敬介はまた、息をのんだ。そこに倒れていたのは青年でもなんでもなく、大学で三年の間よく知っている女友達だったのだ。敬介は言葉を失い、ただ、意識を失って倒れている友達の顔を長い間見つめていた。

＊＊＊＊

「あ～あ。このドアって高いんだろうなあ…」

敬介は玄関の壊れた蝶番を見て長いため息をついた。

「はあ～。せっかく新しいメットを買おうと思って貯めてたのに…これで全てぱあ、だな」

倒れていた勇希をベッドに寝かせてから、敬介は流クリニックに事の次第を伝えるために電話をしていた。話したところで自分の話など、誰も信じてはくれないだろうと思っていたのだが、つい今しがた起こった事件のことを何事もなかったかのように忘れてしまうなんてことはできそうになかった。

半信半疑のまま、電話を取った敬介に真津子は平然と電話が来るのを期待していた、とこたえた。敬介はさっと勇希の家で見たことを説明し、何をすればいいのか指示を仰いだ。まだ興奮さめやらぬ状

態の敬介に真津子はその場で待機するように促し、急いで二人を迎えに行くことを伝えた。真津子との電話を切ったはいいが、ただ何もしないで待っていることができない自分に気がついた敬介はめちゃくちゃになった家の片付けをすることにしたのである。

「勇希のおふくろさんが出張で今週一杯いなくてほんとラッキーだったぜ。もしおふくろさんまでここにいたら、マジで大変なことになっていたに違いないからな」

敬介は呟いた。片付けが終わると箒を見つけたところに戻し、それから勇希の意識が戻ったかどうか確かめようと階段をのぼっていった。

外から差し込んでくる冷たい月の光の下で、彼女の白い顔はまるで蝋人形のように見えた。家のなかはひっそりと静まりかえり、敬介はもう勇希が息をしていないような不安に襲われた。

そっと前かがみになると、全ての意識を両耳に集中させて、勇希のかすかな吐息を聞き取ろうとする。かすかだがしっかりした吐息を確かめてほっとした敬介はまるで腰が抜けたかのようにへなへなとその場へ座り込んだ。

第六章：動き出す黒い影（1）

「ふー」

真津子は自分用の個室に入ると大きなため息をついてベッドの上にどかっと腰を下ろした。ベッドの周りにはまだいくつかのダンボール箱が積み上げられていて小さな個室はほとんど足の踏み場さえなくしている。

「はあ。片付けなくちゃ、だわ」

散らかっているのが我慢できない性分の真津子はげんなりしながら呟いて重い腰をあげる。

勇希が自宅で襲われて十日が経つ。このまま、敬介たちを自宅へ置いておけば関係のない人たちまで巻き込んでしまう可能性がある。そう考えた真津子たちは着の身着のままで真津子の父が所有する診療所までやってきた。

ここは人里離れた森の中で、近くの小さな町まで行くには車に乗っても三十分はかかるほど辺鄙な場所だ。夏にはきれいな森林と大きな湖の癒しの効能を求めて、たくさんの金持ちがここを避暑地として利用していた。だが今はもう十一月。上着がなくては外に出られない季節とあってはこんな不便なところに好き好んで来るものはそうはいない。

そして、真津子とその父、眞以外にこの診療所の存在を知っているものはいなかったので、勇希たちをかくまうのには絶好の場所でもあったのだ。とりあえず勇希たちをこの場所へ連れてきたのは良か

ったが、それからが大変だった。

まず、敬介が壊した玄関のドアとモンスターに壊された勇希の部屋の窓を業者に手配して直してもらう。勇希の母親が帰ってくるまでに元通りにしておかないと、あとで説明するのに困ると思ったからだ。

その業者の口封じにも一苦労した。興味津々な若い作業者たちが一体何があったのかしきりに聞いてくる。口止め料はかなりな痛手ではあったがまだ根掘り葉掘り聞かれたり、詮索されるよりはましである。

それが済むと今度は勇希たち家族と学校側との交渉が待っていた。真津子は父の名を利用して、三人にクリニックで研修をさせる旨を申し出た。クリニックのほうで紅劉国にまつわるある研究をしている。その手伝いの為に三人をしばらく借りたい。何か学術的に価値のあるものを見出した暁には、その情報を大学側にいち早く提供する。その代わり、三人には休学中も必要な単位を与えること。

それが真津子が提示した条件だった。もちろん、研修など全くの嘘である。大人たちをだましているようで嘘をつくのは憚られたが、本当のことを言うわけにもいかない。始め、大人たちは返事に渋っていたが、真津子が父の名前を出した途端、皆二つ返事で了解してくれた。さすが世界に名を成す実業家、流眞の名前は娘の真津子が驚くほど、影響力があるらしい。だがその説得が終わった頃には勇希が最後に襲われてからもう一週間も経っており、真津子や他の仲間の生活に必要なものをかき集めてきたのはほんの昨日のことだった。

しばらくダンボールの中身を探っていた真津子はその中に見覚えの

ない黒いケースを見つけた。不信に思って開けてみると、ひどく傷ついたつくものフルートが分解された状態で紅いビロード張りのケースの中に収められていた。

「そう言えば・・・」

真津子はふと初めてつくもに会った時のことを思い出す。

突然満が腕に包帯を巻いた若い女性を連れてきたと思ったら、自分に彼女の心の中を読んでくれ、と言う。満にしては珍しく興奮した様子でその日、勇希が襲われたところを救ったのがこの安東つくもという少女で、もしかしたらかつての自分たちの仲間のクルツかもしれない、と息もつかずにまくし立てた。そして自分の前世を覚えていないつくもが思い出すのを手伝ってほしい、と満は続けた。真津子が渋ったのは言うまでもないが、つくも本人までもがぜひに、と言うので真津子は渋々承知したのだ。

＊＊＊

昔のいろんな思い出が見える。つくもが初めて五大戦士の一人に任命された時、彼女はまだほんの十六歳だった。その小柄な体に似つかわぬ、身の丈ほどある大きな剣を事も無げに操るその腕前は彼女の右に出るものはいないとまで言われていた。かわいい顔をしながら男勝りで自分のことを「俺」と言うのが口癖で、ケラによくからかわれていたらしい。

懐かしいわね・・・真津子がそう思ったとき、何か黒い靄にかかっ

たようなものが見えてきた。いぶかしんだ真津子がもっと良く見ようとその部分に集中すると、それはコンクリートの壁で四方を固められており、唯一見える扉らしきものは黒い鋼鉄かなにかで出来ている。中にはよほどのものが入っているのか、引き手には頑丈に施錠がしてあるため、真津子ですら中を覗くことはできなかった。

「あれは、きっとつくもが思い出したくない、他人に知られたくない闇の部分なんだわ」

真津子が不安そうに呟いた。

「まさか・・・」

真津子には思い当たるふしがあった。昔、五大戦士だった頃、つくもに関してよくない噂がたったことがある。彼女は五大戦士として紅劉国に仕えているが、裏でよくない一味と係っているらしい、と。そして真津子はその噂を聞いた主君から「もし仮に裏切るようなことがあれば、その手で始末しろ」という命を受けていた。あの噂が真実だったのかどうか、それを知る前に真津子は敵の手に倒れてしまったので未だに真実はわからない。

真津子は襲い掛かる不安を打ち消すように首を激しく振った。この不安が間違いであってほしい、心からそう願った。自分の仲間をこの手にかけるなんて、考えただけでも恐ろしい。だが、その不安は消えるどころか日を追うごとに強くなっていく。

真津子は絶えきれずに新鮮な空気を求めて部屋の窓を開けた。少し痛いぐらいの冷たい風が吹き込んできて忌まわしい考えに囚われていた気分を少しずつ癒してくれた。窓の外に望む木々はすっかり冬の様相で葉の落ちた細い枝がわずかばかりの陽の光を求めて空高く

へとその腕を伸ばしている。少し気分が良くなった真津子は、うんと伸びをすると、また残りの箱を片付け始めた。

第六章：動き出す黒い影（2）

その日の夕方、診療所は思いがけないお客を拾うことになった。皆で近くの町まで買い物に出かけた帰り道。突然、小学生ぐらいの男の子が道の中央に飛び出してきたのだ。瞬時に満がハンドルを切ったお陰で大事には至らなかったが少年は気を失っていた。

いったいどこからやってきたのか汗と汚れでどろどろになった服はあちこち裂けていて体のあちこちに薄い血が滲んでいる。肩まである長い緑色の髪には泥と葉っぱが張り付いていた。この辺りには病院もないのでとりあえず、診療所に連れて帰ることにしたのである。

幸い、満は医師の資格を持っていたので診療するには何も問題なかった。満によると栄養不良のため少し衰弱しているだけで、体の擦り傷以外は特にどこといって悪いところはないようだった。

しばらくして目を覚ました少年は大きな褪めた青い瞳を驚いたように見開くと、おびえたように身を堅くした。

「怖がらなくても大丈夫。ほら、スープだよ。お腹すいてるでしょ？」

子供好きな勇希がやさしく声をかける。少年はしばらくじっと勇希たちの様子を伺っていたが、スープと聞いた途端、よほどお腹がすいていたらしく皿を勇希の手からもぎ取るようにして奪い取るとがつがつと音をたてて食べ始めた。少年はあっという間に三杯のスープを平らげると、初めて自分の周りにいる大人がみんな自分に注目

しているのに気が付く。

「お腹が一杯になったら話が聞きたいんだけど」

今まで黙ってそんな少年の様子を伺っていた真津子が少し緊張した面持ちで口を開いた。

「何が聞きたいの？」

少年はさっきとはうってかわった堂々とした態度で答える。

「まず、お前の名前は？いったいどこから来た？どうして急に林道に出てきたりしたんだ」

満が落ち着いた声で尋ねる。

「僕は奇葎梗平（きりつきょうへい）。悪い三人組に追われてて、なんとか逃げてきたんだけど途中で道がわからなくなっちゃってさ。長いこと歩いてたらあの林道に出たんだ。それから先は・・・覚えてない」

少年はまだ変声期前の愛らしい鈴を転がすような声ではっきりと答えた。

「悪い三人組？なんでそんなやつらに追われてたんだ、お前？」

敬介が椅子に逆方向に座るとその椅子の背にもたれかかりながら尋ねる。敬介はどうもこの姿勢が好きらしく、時折そのままの格好で居眠りしていたりするのを勇希はよく知っていた。

「あ、僕、ちょっと変わってて・・・」

梗平は言葉につまってうつむいた。

「言いたくないなら言わなくてもいいけど。私たちでできることなら力になるよ」

勇希は優しい言葉をかけながら、そっと微笑んでみせる。そんな勇希を梗平は上目遣いでためらったように見つめていたが、しばらくすると「ありがとう」と小声で呟いた。

「ちょっと、勇希！」

真津子が少しとがった口調でたしなめる。

「力になるって、あなた何を言うの？私たちは今そんな状況じゃないでしょう？」

「でもただのいじめとかじゃないみたいだし。あんなにぼろぼろになっていたんだもの。ほっとけないわ」

人のいい勇希は心の底からこの見ず知らずの少年のことを心配しているようだった。

「あのねえ、そうは言うけど、今みんな例のことで手一杯じゃないの。父さんがまた出張中だから、私や満は流クリニックの業務だって疎かにできないし・・・」

「流クリニックって、君たち、流クリニックで働いているの？」

真津子の言葉を耳ざとく聞いた梗平が急に話に割り込んだ。

「ああ、そうだ。真津子、このお姉さんはあそこの娘さんなんだ。俺もあそこで雇われている」

そう、真津子の代りに満が答える。

「じゃ、じゃあ、僕、ここに置いてください」

梗平は突然その大きな目を輝かして身を乗り出すと、唐突にそう言った。咄嗟のことに真津子はあっけにとられたような顔をする。

「ここにって、あなたお家は？」

今度はつくもが聞く番だった。

「僕、なんだか普通の人と違うみたいで、家には戻れないんです。確か流クリニックって、そういう子供達の施設ですよね？」

梗平は殊勝な顔で言い寄ってくる。

「え、ええ。そうだけど・・・」

真津子はどもりながら答える。

「普通と違うってお前、どう違うんだよ？」

敬介はどう見てもただのチビッコにしか見えない梗平を見ながら聞く。

「えっと、うまくは説明できないんですけど、僕の周りでいろんな

説明できないことが起こったりして・・・そのせいであいつらにも追われていたんです。お願いします。僕をここに置いてください」

梗平は必死に懇願してくる。童顔の少年の大きな褪めた青い瞳で上目遣いに見つめられると、びしょぬれになった子犬を見ているような、なんとも言えない気持ちになってくる。皆そんな梗平を見てかわいそうになった様子で、半分困ったような顔でお互い顔を見合わせた。

だが、真津子だけは皆と違う感情を持っていた。初めてこの少年を見た時から、真津子は得体の知れない嫌悪感に苛まれていた。何かがおかしい、そう真津子は感じていた。何がおかしいのか、と問われればその問いに対する明確な答えを持っているわけではなかった。ただ、真津子の第六感がこの少年は何かを隠している、関われば何か大変なことが起こる、そう予感していた。

「ねえ、いいじゃない。部屋はもう一つ空いていることだし、ここにいさせてあげれば」

珍しくつくもまで勇希の意見に賛同してそう言うと、真津子に返事を促した。皆が同意するように首を立てに振る。

賛成四、反対一。

どうあがいたって民主主義の世界で今回だけは真津子の意見は通りそうもなかった。

「はあ、仕方ないわね」

大きなため息をつくと、真津子は渋々承知すると、重い足取りで空

いている部屋の準備に向かった。私の杞憂だといいんだけれど、そう心の中で願いながら。

第七章：フォーチュン・クッキー（1）

勇希、敬介、つくも、満、真津子と梗平の六人は診療所から車で少しいった所にある小さな中華料理店に来ていた。真津子によると真津子の父、眞がこの場所を買う前から営業している古い店だそうで、なるほど店の内外問わず壁にはみみずが這ったような無数のひびが入っていたし、置いてあるテーブルや椅子も長年使い古されたような粗末なものだった。

そんなひどい有様にもかかわらず、普段お客が多いのは昔ながらの調理法を守った料理を出すのはこのあたりでここしかない、ということからのようだった。まあ、この辺りは山林のすぐ側で避暑地のようなところなので、裕福な家のものが夏休みを利用してここに来る以外はほとんど人が住んでいないので、他の店に行きたくてもいけない、というのが実情ではあった。

それでもそこの料理は手ごろな値段で美味しかったので、この診療所に住むようになってからというもの、勇希や啓介たちはよくこの店を利用していた。といっても診療所は山の奥地にあったので、車なしで外に行くことはよほどの体力自慢の者でないと無理だったので、満や真津子がいろんな雑用処理のために出払っていないときでなければ来ることはできないのだが。

いつ何時ダコスやその一味が襲ってきても他の関係のない人たちをできるだけ巻き込む確立の低い場所というのにこの診療所は打ってつけだった。ただ、最初のうちは珍しい動物や植物を見て気を紛らわせていた勇希たちだったが、もともと街中で育ってきたので、どこにも外出できない、というのは違った意味で辛いものもあった。

だから、こんな錆びれた店でも、少しでも外出できるというのがうれしくて、余計にここの店の料理が美味く感じていたのかもしれなかった。

その日も梗平を入れた六人で店に行くと、いつも食事時にはお腹を空かせた人たちでごった返しているのだが、少し夕ご飯には早い時間だからだろうか、今日は不思議と勇希たち以外、客は誰もいなかった。

一通り食事を終えると、六人は他に誰もいないのをいいことに、これからどうやってダコスを倒していくのか話合った。

「ただ向こうからやってくるのを待ってるばかりでは埒があかない。なんとかしてやつらの隠れ場所を探し出し、今度こそ、ダコスを封印するべきだと俺は思うが…」

満は同意を得るように丸いテーブル越しから他の仲間を見渡した。

「でなきゃ、いつまでもくだらない雑魚相手の戦いが続くってわけか…」

つくもはがらにもなくため息をつく。いくら元気だけが取り得のつくもでもこう毎日襲われるといささか疲れも感じてくる、ということだろう。

実際、ダコスが送ってくる刺客はたいして強くもなく、代わり映えのしない雑魚ばかりであったが、連日の襲撃に梗平以外は皆同様に疲れが見え始め、うんざりさえしていた。

「俺もおっさんの考えに賛成だな」

敬介は相槌をうちながら大皿に残っていた最後の餃子を口にほおりこんだ。

「もう、食べながらしゃべるのはやめてよね、みっともない」

つくもはあからさまに嫌そうに眉根に縦皺を寄せてみせた。敬介は食べていた餃子をごくんと飲み干すと、悪ガキのようにつくもにアカンベーをする。

「まったく、二人ともいい加減にしなさい。子供じゃあるまいし…」

真津子は痴話げんかを始めた敬介とつくもを諌めながら、ちょうどお勘定を持ってやってきたウェイターに愛想笑いをしたが古ぼけた白いシャツと黒い綿パンを着た若い中国人のウェイターはまったく表情を変えようとはしない。

背は敬介と同じぐらいだろうか。その体はまるで骸骨のように華奢で色白の無表情な顔はなんとなく生気が失せているようにも見えた。ウェイターはそっと勘定と小さなクッキーを六つ乗せた小さなトレーを真津子の側に置くと、テーブルの上をかたずけながら、「あなた、運命忘れずに選べ」とひどい中国語なまりでぼそりと言った。

「何を選べって？」

敬介はつくもに反論するのを止めてウェイターに尋ねる。

「運よ、運。これは『フォーチュン・クッキー』って言ってね、中に小さな紙切れが入ってて引いた人の運命を教えてくれるってわけ」

真津子は言いながら一つ取ると皆が取れるよう、丸テーブルの中央に残りのクッキーが載ったトレーを押しやった。みんな言われた通り、ひとつずつ選んでいく。勇希が最後に残った一つを取ったことを確認した中国人のウェイターは意味ありげにもともと大きくない目をまるで一本の糸のように細めてみせた。

「謝謝〇（シェイシェイ二）」

ウェイターはぼそりと言うと、染みのついたテーブルクロスの上に置かれた真津子のクレジットカードと共に奥のレジへと消えていった。

ウェイターがいなくなったのを確かめると、皆一斉に自分のクッキーを割って中の紙を取り出した。ただ一人、敬介だけが中の紙に書かれていることなどには目もくれず、残ったクッキーをぽい、と自分の口にほうり込む。

「なんて書いてあるか見ないの？」

つくもが自分のを目だけで読みながら聞く。

「見ないね。ばかばかしい。こんな紙っきれに俺の一体何がわかるっていうのさ？俺が唯一信じるのは美味い食い物だけなんだ」

そう言いながら敬介はつくもが割ったクッキーにまで手をだそうとして、案の定つくもに手をはたかれていた。

勇希は隣に座っているうるさい恋人たちに苦笑しながら自分もクッキーを割って中の紙を取り出した。割った片方を口に入れる。少し甘くてバニラのようなにおいが口の中に広がった。残りをまた口に

ほうりこむと手にした紙を見て硬直する。

「ね～書いてあることの前にさ～『ベッドで』って付けると笑えるメッセージになるんだって～。勇希のはなんて書いてあった？」

まだ敬介の耳をひっぱったままのつくもが無邪気に隣に座った勇希に聞いてくる。だが、つくもの問いに勇希は答えない。

「勇希？どした？なんか悪いことでも書いてあった？」

何か様子がへんだと気付いたつくもは真面目な顔で勇希の顔を覗き込む。勇希がはっと気付くと皆が心配そうな面持ちで自分を見ていた。勇希は思わずわざとらしい笑みを浮かべた。

「あ、いや…なんでもない。くだらないことだった…はは…」

いかにも疑われそうな下手な芝居をしながら勇希はその紙を胸ポケットの奥深くへつっ込んだ。

「へえ～？くだらないことねえ～？」

つくもは怪しいとばかりに勇希を見る。

「ほ、ほんとになんでもないんだってば。つくもちゃんったら、や～ね、そんな風に見ないでよ」

勇希は必死に取り繕いながら話題を変えようと試みた。

「ほう、みなさん選んだ運命はお気に召されましたか？」

突然声をかけられて、勇希とつくもは同時にびくんと体を震わせた。

声がしたほうを見ると、黒い奇妙な服に身を包んだ背の高い、これもまた骨と皮ばかりに痩せた男が　青白い顔にぞっとするような薄ら笑いを浮かべて立っている。先ほどのウェイターにも負けないぐらい細い灰色の目が妖しげに光っていた。細い皮ひものようなものでくくられた長い緑色の髪にはつやがなく、骨が透けて見えるのではないかと思われるような痩せた背に力なくだらりとたれ下がっていた。

第七章：フォーチュン・クッキー（1）（後書き）

表記されない漢字の部分は〇としています。

第七章：フォーチュン・クッキー（2）

「お前、一体何者だ？」

敬介が男の異様な有様に今にも掴み掛からんと座っていた椅子から勢い良くたちあがったので、木でできた椅子は大きな音を立てて後ろにひっくり返っていた。つくもも足元に置いていた剣が入った袋にそっと手をのばし、いつでも応戦できるように体制を整える。

「私か？私の名前はルシファー。ダコス様の命で貴様らの愛しい姫を頂きに参ったのだ」

男は大げさに口をゆがめると奇妙な笑みをつくる。

「そう言われて俺たちが簡単にはい、そうですか、と言うとでも思っているのか？」

つくもは男言葉でそう言うと、ルシファーと名乗る男を睨み付けた。

「ふん、まさか。私としても、お前達が素直になってもらっては困るんだよ。なにしろ私はお前達を殺しに来たのだからね。楽しませてくれなくては、私が来たかいがない、というものだ」

ルシファーは妙にゆっくり話し終わると、やおら右手を掲げたのと黒い気弾が敬介たちに向かってきたのはほぼ同時だった。

「何を…！」

敬介が短い叫び声をあげる。
黒い気弾は見る間にいくつかの小さな矢の形に分かれるとつくもと敬介、満の三人に直撃した。
「つくも！敬介！満さん！」
後方に吹き飛ばされた三人のほうへ駆け寄ろうとした勇希は自分に向かって再度発せられた気弾をすんでのところで避けた。
「ふん、もう少し骨のあるやつらだと期待していたのだが…どうやら私の思い違いのようだな」
ルシファーは蛇のような目でにやりと笑うと一歩前へ歩を進める。
「さあて、それではお前達の姫君を頂いていくとしよう。それから喜んでお前達をあの世に送ってやる」
ルシファーの妙にゆっくり間延びした話し方に敬介は苛立ちを感じたが、先程の黒い気弾の威力は思いのほかすさまじく、体が思うように動かない。つくもも同じ気持ちのようでルシファーの青白い顔をものすごい殺気のこもった瞳でにらみ返しながら小さく舌打ちをした。
「貴様やダコスにナユルは渡さない」
真津子が勇希の前に立ちふさがろうとしたその時、どこからかおだやかな男の声が静かに、確信に満ちた声でそう答えた。真津子たちは一瞬自分の耳を疑った。なぜなら、その声はそこにいる誰かから

発せられたものではなかったからだ。

その声は昔から知っている者の声のようにどこか懐かしく、皆そのたった一言を聞いただけでルシファーの圧倒的な力の前に萎えかけていた気持ちがみるみる勇気付けられていくのを感じていた。

「俺がいる限り、ナユルには指一本ふれさせはしない」

その男の声が今度はみなのすぐ側で聞こえた。真津子はゆっくりと声が聞こえてきたほうを向く。

「貴様は！」

梗平が驚愕にその褪めた青い瞳を皿のように見開いた。

二十歳そこそこに見える若い青年がたった今まで勇希がいた場所に立っていた。少し長めの紺碧の髪が体の周りに立ち上る青い気にゆっくりと揺れている。青年の大きな藍色の瞳はルシファーの細長い灰色の瞳をじっと凝視して離さなかった。

「カ…カミン？」

つくもがもごもごとその青年の名をつぶやいた。確かに今つくもたちの前にいるこの青年は勇希が灯台の地下で見つけた歴史書に載っていたカミン・タイラーだった。カミンが右手を目の前へかかげると青い気弾が彼の掌からほとばしった。

「ふん、驚いたな。まさか本当に五大戦士が集まるとは…。だが貴様の能力（ちから）など効かん」

ルシファーの黒い気弾はカミンの青い光を真っ向から受け止めると、どんどん押しはじめた。カミンはその細い体とは似ても似つかないルシファーの強い気に対抗しようと必死で歯を食い縛る。

「カミン！」

敵がカミンに気を集中させているからだろう、途端にルシファーの気弾の影響から開放された敬介がかつての仲間の名を叫ぶとその手から出た電気の塊がルシファーの右腕を切り裂き真っ赤な血がその黒い袖に染みを作った。ルシファーはその痛みに少したじろいだ様子で、カミンへの攻撃が次第に弱まっていく。

状況を見ていたつくもは足元に転がっていた剣を取るとカミンへと投げた。カミンはつくもの剣を受け取るとカミンの青い気を帯びて光輝いた剣でルシファーの心臓部を貫いた。ルシファーの断末魔のような叫びが梗平の耳に響く。

「必ず…次は必ずお前たちを…殺す」

今はもう息絶え絶えになったルシファーは搾り出すような声でそう言うと、その口から黒い影が飛び出してやがて消えていく。それと同時に床に崩れ落ちた男の体はほんの数分前に勘定を持ってやってきた、例の中国人のウェイターのものだった。どうやらルシファーに体を乗っ取られていたらしかった。真津子はそっとウェイターの腕を取って脈を見たが、まるで随分前に生き絶えたかのようにその腕は冷たく、堅くなっていた。

敵の黒い影が消えた時、梗平の姿も見えなくなっていたのだが、誰も気がついてはいなかった。そこに残っていた四人は自分たちの目の前に立っている懐かしい友に気を取られていたからだ。

「カミン…お前、本当に？」

始めに口を開いたのは敬介だった。

カミンの藍色の瞳はかつての仲間を捕らえると優しく微笑んで見せた。

「怪我、してるじゃないか、早く手当てしたほうがいい。三人とも」

怪我を負った三人を労わってカミンが優しく答えたが誰も聞いてはいなかった。

「怪我なんかどうでもいいわ。こんなのかすり傷だし。それより、カミン、一体いままでどこに行ってたの？あなたのこと、みんなずっと探していたのに…」

矢継ぎ早に尋ねるつくもにカミンは何も答えない。つくも達の前に立っていたカミンのその姿は今、ゆっくりと勇希のそれへと変わっていく。

「カミン？！」

つくもは驚いて悲鳴に近い声をあげると今や勇希の腕を強くつかんで揺さぶった。

「な…痛いよ、つくも。一体何があったの？」

つくもに強く揺さぶられた勇希は驚いたように目を瞬かせる。そんな勇希のセピア色の瞳の中にカミンの影はどこにも見当たらなかっ

た。

第八章：つくもの秘密（1）

診療所にある一番奥の一室は今、勇希の部屋として使われていた。あの中華料理店での一件のあと、真津子が警察に通報し、一連の事情徴収を終えると満が運転する４ｘ４でこの診療所に帰ってきたのだ。

幸か不幸か真津子の父親が地元の警察署長と友達だったお陰で、あまりしつこく事情を聞かれることなく、家に帰ることを許されたのである。もし署長が真津子や流クリニックの事情を事前に知っていなければ、こう簡単に真津子たちの証言を信じてあっさり家に帰すようなことはしなかっただろう。

おそらく、流クリニックに集まった子供達が時折起こす科学的に説明できないような事件を今まで何度も目の当たりにしてきたせいだろう。少しお腹のあたりがたるんできている中年の署長は、ウェイターが素人目に見ても死後だいぶ経っているということにあまり驚いてはいなかった。

もちろん、真津子たちが全て本当のことを話したわけではない。いくらなんでも自分達が古代史として知られている五大戦士の生まれ変わりでかつての敵であるダコスが自分達を亡き者にしようと刺客を送っている、なんていう話を信じてもらえるとは思えなかったからだ。そんな話をしたが最後、気が狂っていると思われて精神病院に入れられてしまうだろう。

死亡推定時刻からして真津子たちが殺害したのではないということ

は分かってもらえたようだが、とにかく今は検死の結果が出るまで自宅待機、という条件で皆釈放されたのだ。

その後、診療所に戻ると勇希は他の仲間と同じく自分の使っている部屋でしばらく考え事をしていたのだ。しばらくすると勇希はふと一枚の小さな紙切れを胸ポケットから取り出した。それは数時間前に中華屋で勇希が選んだあのフォーチュン・クッキーの中に入っていたものだった。勇希は目を閉じるとカミンの優しい藍色の瞳を思い浮かべる。

「カミン…」

勇希はそっと呟いた。今日、自分がずっと夢に見てきたあの男性(ひと)が紅劉国でかつて五大戦士の一人と呼ばれていたカミン・タイラーだということを勇希は知った。そして、そのひとが自分自身であるということも。

いや、それは少し違う。カミンと勇希は同じ体を共有していただけで、同じ魂(こころ)を共有していたわけではないからだ。勇希が危険に遭遇した時、その時だけ、カミンの魂が彼女(ナユル)を救うために表に出るらしい、それが皆の意見だった。

真津子や他のみんなはカミンと話がしたいと願っていた。だが、それには、真津子が勇希を眠らせて彼女の無意識の部分からカミンを引っ張り出してこなければならない。なぜなら勇希が表に出ている間、カミンが皆と話すことはないからである。

真津子はもちろん勇希に無理強いしようとはしなかった。それが彼女のポリシーだから。だが、皆がカミンと話すことができなければ、ダコスを倒す方法は見つからないかもしれない、と真津子は説明し

た。

カミンの魂がなぜ、勇希の体に封じられているのか、誰にもわからなかった。そんなことが実際に可能なのか？あれは自分たちがカミンに会いたいがために造り出した幻覚ではなかったのか？いや、幻覚であれば四人全員が同じものを見るはずはない。

科学的に立証できるできないに係らず、自分達が見たことは確かな事実であり、今自分達がおかれている状況を知る限り、不可能なことは何もないと考えるのが当然である。

では考えられる可能性としてはダコスが倒される前にカミンになんらかの呪術をかけたのではないか、もしその時の状況をカミン本人に確認できれば、何か打開策が見つかるやもしれない、というのが皆の意見であった。勇希もカミンと話がしたい、そう思う気持ちは他の皆と同じだった。真津子なら、その方法を見つけてくれるかもしれない。そうすれば万事うまくいくに違いなかった。

「それなら、この胸騒ぎは一体何？真津子や他のみんながカミンと話すことに不安を感じるなんて」

勇希は自分に問い掛けたがその答えは見つからない。

ただ混沌とした闇の渦が自分の心の中に渦巻いてどうしようもないやるせない気持ちになるのを感じていた。

どうにかしてこの気を紛らわせなければ、闇の渦の中に引き込まれて二度と戻れない、そんな不安に駆り立てられた勇希はふとあの日記帳のことを思い出した。彼女は小窓の前に置かれた小さな机に近づくと、一番上の引き出しを開けてあの灯台で見つけた虹色に輝く

日記帳を取り出した。

流クリニックに来てからというもの、勇希はほとんど毎日のようにこの日記帳を開いていた。

だが、あの日、自分の家で真っ赤な毛に覆われたキング・コングに襲われたあの日から、この日記帳はずっと何も見せてはくれなかった。何度どのページを開いてもただ真っ白なページがどこまでも続いているだけだった。それでも勇希は幾度となくこの日記帳に向き合った。いつか、何かを探し出せる、そう願って。今もまた、あのカミンの映像が突然飛び出して勇希に向かって微笑みかけてくれるのを願いながら日記帳を開いてみる。何枚かページをめくってみるが、やはり何もみつかりはしなかった。

「どうして、カミン？どうしてもう何も言ってくれないの？」

涙が勇希の瞳からこぼれ落ち、虹色に輝く日記帳の上に落ちていく。だが、その涙の雫は日記のページを濡らすことなく、それどころか紙の向こうにも世界があるかのようにすっと消えていった。勇希は不思議に思い、そのページに触れようとした時、誰かが部屋のドアをノックする音がした。

「はい？」

勇希は急いで涙に濡れた頬をふくと返事をする。

「あ～、勇希、あたしだよ、つくも。入ってもいいかな？」

いつもより謙虚なつくもの声がドアの外から聞こえる。勇希はそんなつくもの声を聞いたことがなかった。

「ええ、どうぞ」

勇希はそう言いながら先ほどまで持っていたあのフォーチュン・クッキーの紙切れを日記帳の間に挟むと引き出しの中へ閉まって鍵をかけた。なぜだか勇希はその紙に書かれている文字を他の人に見られたくなかったのだ。

勇希がドアを開けると、そこにはクッキーの箱と2リットル入りコーラのペットボトルを抱えたつくもがにっこりと疲れた笑みを浮かべていた。

第八章：つくもの秘密（2）

「一緒に、食べようかと思ってさ。さっき、夕飯の前にたくさん買ってきてたんだ。結構美味しいんだよ」

なぜかつくもは言い訳がましくそう言った。

「わあ、ありがとう。椅子とかないから、ベッドにでも座って」

勇希は言いながら机の一番下についている深い引出しからプラスチックの使い捨てコップを二つ取り出すとその一つをつくもへ渡した。つくもはクッキーの箱をベッドに置くと、勇希と自分用にコーラを注ぐ。

約二十分もの間、二人は気まずそうにベッドに座って何も言わずにクッキーを食べていた。箱のクッキーが全てなくなってしまった時、つくもは真剣な顔になると勇希のほうに向き合う。

勇希はつくもの様子が何かおかしいと気がついた。つくもの緑色の瞳はいつになく真剣だった。彼女は何も言わず、ただ勇希の顔を、何か思いつめたような顔で見つめている。

「どうか、したの？」

とうとう勇希はその沈黙に耐え切れなくなって口を開いた。

「勇希…」

つくもは一瞬躊躇ったが、クルツが使っていた男言葉で言葉を続ける。

「俺は…俺達がカミンと話すことを恐れているんじゃないのか？」

勇希はつくもの顔を不思議そうに見つめ返したが、つくもはそんな勇希の表情にはかまわず続ける。

「あ、あんたは何も心配しなくていいんだよ。きっとカミンから何か良くない事を聞かされるんじゃないかって、心配しているんだろうけどさ。俺はナユルとおんなじくらい、カミンのことを良く知ってるつもりさ。敬介だってカミンがあんたのことをどんなに愛しているか、知ってるんだ。勇希、あんたはナユルだ。俺達の皇女、そして、カミンの愛した女性（ひと）。カミンはあんたを傷つけるようなことはしないよ」

「なに…言ってるの？」

勇希はそう聞き返したが、つくもが何を言おうとしているか、その答えを聞かずとも勇希にはよく分かっていたはずだった。だが、つくもからは勇希の思いもよらない答えが帰ってきた。

「勇希、敬介はカミンをあんたの家で見たって言ってるんだ」

つくもの緑色の瞳が勇希の驚いた顔をじっと見つめる。

「なんですって？」

「学園祭の夜、敬介があんたの家に行っただろう？あの時、真っ赤

な毛に覆われたモンスターにカミンが襲われているのを見たって敬介が…」

勇希はなんと言ったらいいのか言葉が見つからず、つくもの続ける言葉をただ待っていた。

「もちろん、その時、敬介には一体誰なのか、はっきりわからなかったらしい。だけど、後で俺に話してくれたんだ。あれは間違いなくカミンだったって。カミンは敬介にあんたを護れと言ったそうだ。自分だってモンスターに首を締められて死にそうになっていたっていうのに」

勇希のセピア色の瞳はつくもの緑色の瞳に浮かんだ痛みを見逃さなかった。つくもは何かを隠していて、その何かがつくもを苦しめている、そう勇希は思った。

「つくも、大丈夫？何か困っていることがあるんじゃ…？」

勇希は聞いたがつくもは寂しそうな笑顔を浮かべるとそっと首を振った。

「最初はさ、敬介のことで、あんたに嫉妬してるんだって思ってた。だけど、あたしにはあんたが敬介のことなんて、なんとも思っていないこと、分かってたんだ。なのに、なぜかいつもあんたと張り合わなきゃ気がすまなくて…」

つくもはいつもの口調に戻ってそう言うと、ベッドから立ち上がって小窓のほうに歩み寄った。窓から外を眺める。大きな黄色い月が数え切れないほどたくさんの星の瞬きと共に暗く限りなく続く夜の空でやさしく輝いている。

「けど、今、わかったんだ。あたしは昔から、あたしが五大戦士の一人だったあの頃から、あんたに嫉妬していたんだって」

つくもは不意に振り向くと勇希のセピア色の瞳をじっと見つめた。

「その為に、あたしは大切な人を失った。ナユル、あんたの気もちも裏切ってね。嫉妬のせいで、あんたを…カミンを救ってあげれなかった」

そう言うつくもの目に何かが光った。

「つくもが泣いてる…」

勇希は心の中でそう呟いた。

つくもは無理に笑顔を作るとしっかりした口調で続ける。

「あたしは二度と同じ過ちは犯さない。ナユルだった頃から、あんたはあたしに善くしてくれた。今だって…。勇希、もう、あんたを失いたくないんだ。大切な人を失うのは、もう…。カミンの為にも、あんたを失うことはあたしには…」

つくもと勇希はそれから長い間何も言わずにじっとお互いを見つめていた。何も言わなくてもちゃんとお互いの気持ちが通じている、そんな気がしていた。

部屋の外では一匹の蟋蟀が哀しい歌を奏で、蛍がその短い命の限りを暗闇の中で懸命に輝かせている。深い夜の闇が静かに穏やかな世界を包み込んでいった。

第九章：カミン・タイラー（1）

「カミン…カミン…」

自分の名を呼ぶ女の声がまるで暗く長いトンネルの中で囁いているかのように辺りにこだましている。

「誰かが俺を呼んでいる。いったい誰が？君は一体誰なんだ…？」

カミンは自分の意識と戦っていた。自分が今起きているのかそれとも夢を見ているのか、よくわからない。頭の中で夢の世界に留まっていたい、ともう一人の自分が叫んでいる。それなのに何か、いや、何者かが身を隠そうとしているカミンを闇の中から引っ張り出そうとしていた。

「俺にかまわないでくれ…放っておいて…頼むから！」

カミンは心の中で見えない声に懇願する。

「目を覚ましたくない…ここから出るわけにはいかないんだ…駄目だ！」

カミンは自分を闇から引きずり出そうとする姿の見えないその女に向かって叫んだ。だが、その女はカミンの悲痛な叫びなどまったく気にも止めていない様子で続ける。

「カミン、答えて！私の声が聞こえてるんでしょう？お願いだから、

返事をして。カミン！」

最初はおぼろげだったその女の声が、今は妙にはっきりとカミンの耳に聞こえてきて、ついにカミンは目を開けた。眩しい蛍光灯の光がカミンの藍色の瞳に差し込んでカミンは思わず形のいい眉をしかめた。あまりの眩しさにしばらくは何も見えない。

どれくらいあの闇の中にいたんだろう？カミンはふと思ったが、随分長い間いた、というだけで、自分が一体あの闇の中で何をしていたのか、いつからあそこにいたのか、全く思い出すことができないことに気が付いた。

「っ…ここは…一体？」

暫くすると目が光に慣れてきたのか周りの様子が少しずつ見えてくる。

「カミン」

夢で聞いたのと同じ女の声がまたカミンの名を呼んだ。

「…マ、ホーニー？」

カミンは声のするほうをゆっくり振り向くと、戸惑ったような声でその声の主の名を呼ぶ。

「カミン…ほんとに…本当にあなたなのね…」

真津子はほっとしたのかその紫の瞳を涙で濡らした。カミンは四人の懐かしい顔が自分を心配そうに覗いているのに気が付く。カミン

の藍色の瞳が驚いたように広く見開かれた。

「ケラ…チドル…それに、クルツも…？」

カミンは仲間の名を呼んだが、まだ何が自分の身に起こったのか、状況がよくつかめていないようだった。カミンは仲間の顔を見つめながら、まだぼうっとした頭で状況を把握しようとした。

「な…なんで俺がここに…？」

ふと、何か思い出したのだろう、カミンは急に厳しい表情になると辺りを見回した。

「ナユル！ナユルはどうした？何か、あったのか？」

カミンは辺りに敵がいないかと見回したが何もおかしなところは見当たらない。　真津子は自分の手をカミンの肩に置くとカミンに落ち着くように促して、今までカミンが寝かされていた長椅子に座らせた。

「心配しないで、カミン。ナユルのことなら大丈夫。私たちがあなたと話せるように、今は眠っているだけだから。」

カミンは驚いたように藍色の目を見開くと、まだ困惑した顔で古い仲間の顔をまじまじと見つめた。

「どういうことだ？」

「俺たちみんな、お前と話がしたかったんだよ、カミン。一体、お前に、そして俺たちに今何が起こっているのか、教えてくれないか

？」

部屋の反対側に置かれた木製の椅子に座っていた敬介がその真剣な言葉とは裏腹に、まるで好奇心旺盛な子供のようにその瞳を輝かせる。

「勇希…ナユルが、あなたを呼んでくれって言ったのよ。あなたなら、私たちが知らない何かを知っているかもしれないと」

つくもが隣に座りながらそう、説明した。

「ナユルは、俺が彼女の中にいることを知っているって言うのか？」

カミンは驚きを隠せない様子で呟く。

「ああ。彼女だけじゃない。俺たちみんな、お前が勇希の中にいるということは分かってる。そして、彼女が危険な時だけ、お前が姿を表すってことも。だが、たった一つ、わからないのはどうしてお前が勇希であって、自分自身でないのか、ということだ。お前に一体何が起こったのか、どうしてお前が勇希の体を共有しているのか、それがわからないことにはダコスから勇希を、ナユルを護ることは無理なんじゃないか、それが俺たちが出した答えだ」

窓の側に立っていた満が代表して答える。

「それは…」

カミンは言葉を濁すとうつむいて下唇を噛んだ。

「言いにくいこと、なのね？」

真津子はそんなカミンを見てそっと声をかける。いつも快活でナユルのこととなると無鉄砲だったカミンが言葉を濁すなど、真津子には信じがたいことだった。何か、言いたくないこと、皆には知られたくない事情があるに違いない。

聡明な真津子がそんな可能性を考えなかった訳はなかった。だが、今のままでは何も解決の糸口は見つからない。ぐずぐずして手をこまねいているばかりでは、いつかダコスの思う壺に嵌ってしまう。

事実、昨日襲ってきたあのルシファーはかなりの凄腕だった。あのカミンの技をもってしてもカミン一人では太刀打ちできなかったのだ。このままでは確実に勇希を奪われてしまうのは時間の問題だ。流暢なことを言ってはいられない。事は一刻を争うのだ。

もちろん、勇希が嫌だと言えば無理強いはしないつもりであったが今朝になって、勇希は真津子たちがカミンと話すことを望んだのである。それでも、やはりカミンを無理やり引っ張り出して話をしようなどというのは間違いだったのではないか、真津子は少し後悔していた。

言いたくないなら言わなくてもいい、そう真津子が言おうとした時、カミンはわかった、と小さく頷くと、ぽつり、ぽつりと話し出した。

第九章：カミン・タイラー（2）

カミンは、あの日、あの戦闘の最後の日、死闘の末ダコスを半ば倒すことに成功した。半ば倒す、というのはおかしな表現ではあるが、実のところカミンはダコスにとどめを刺していなかったのだから、やはりそれが適当な表現なのである。あの時、確かにダコスは死の淵にいた。あと一押しで完全に倒すことができる、それなのにカミンはその一手を下すことに躊躇していた。

それはカミンがある人物から、紅劉国の一部の者の間で実しやかに囁かれているナユルに関するある秘密を聞かされていたからだ。それは、カミンの愛するナユルが、実は王家の血を引く皇女などではなく、一時は邪悪な神官とさえ噂された、憎きダコスの実娘であるという、全く馬鹿げた噂だった。自分が今のいままで信じつづけ忠誠を誓った国王が、国民にあれほど愛されていたあの国王が、実は影でいろんな不穏な糸を操っていた、そんなことを聞かされて、はいそうですか、と信じられるはずがない。

「馬鹿げている」

そう、カミンは掃き捨てるように言った。

でも、本当にそうだろうか？自分は本当のところ、どこまであの国王のことを知っている？

まだ、都に足を踏み入れるなど夢のまた夢と思っていたあの日、突然国王と皇女がカミンの住む紅鐘（こうしょう）村に訪れた。そしてそれまで犯罪という犯罪もなく、穏やかで安全そのものだった村に黒い影が現れた。偶然その危機に通りかかったカミンが二人を助けたのである。

そんなことがあの村で起こったのは、後にも先にもあの日だけ。どう考えてもあれは国王、いや、皇女ナユルを狙っていた。二人がその時間、その場所に来るということを先に見越して待ち伏せしていた様子だったのだ。

だが、二人の外遊は城内のごく一部の者にしか知られておらず、実際その外遊は隠密であったため、一緒にいた従者はナユルの身の回りの世話をする下女をいれてたったの三人。村長でさえも二人の突然の訪問に慌てふためいていたという。

訪問先の長にすら前もって知らされていなかった。それなのになぜ、あの刺客たちはあの場所にいたのだ？情報がどこかで漏れていた？

ダコスはその昔、国王の側近だったと聞いている。何か善からぬことを企んで、国外追放になったとの噂だが、その真偽は定かではない。何者かがダコスの存在を疎ましく思い、陥れようとした、という可能性もなきにしもあらずといった具合だった。

いずれにせよダコスに同情し、密かに情報を流していた者が城内にいたと考えるのが普通だろう。自分を追放した国王を恨んでいたダコスにとって、これは国王を狙う絶好のチャンスであったに違いない。

欲に溺れた邪悪な神官ダコス、紅劉国にとって、ダコスほど迷惑な存在はない。それが国民一般に浸透した考えだった。もしかすればそれは大変な誤解なのかもしれない。だが、根拠のない噂でも、それを数千、数万の民が真実と語れば、それが真実になってしまうのだ。それが噂というもので、それが集団の恐ろしいところでもある。

だが、真実はどうであれ、ダコスは紅劉国にとって災厄をもたらす存在に変わりはない。理屈はそうなのだ。

「だが…」

カミンは迷っていた。

何を信じればいいのか。カミンの心に何かひっかかるものがあった。それがあの噂だったのだ。

そんなことはどうでもいいではないか、心の中のもう一人の自分が囁いた。今ダコスの息の根を止めてしまえば、紅劉国は救われる。そうすればカミンは立派に役目を果たしたということで都に帰ればいい暮らしが待っている。

もともと、都に来て国を守れば自分の村にもどっさりと報奨金が入ることになっていた。それほど貧しいというわけではなかったが、村には家の手伝いのために学校に行けない子がたくさんいた。報奨金があれば、あの子たちも学校に行くことができる。余計な事は考えず、自分の使命をまっとうしろ。そう、冷静なもう一人の自分が言っているのが聞こえる。

だが、カミンは真実を聞かずにはいられなかった。それはカミンがナユルを愛してしまったから。

「一つだけ、教えてほしいことがある」

側の岩になんとか上半身を起しもたれかかっていたダコスに近づくとカミンは堅い声で言った。

「ふっ、今更何を…」

深手を負ったダコスは苦しそうに息をしながら吐き捨てるように言った。

「貴様は、ナユルの父親なのか？」

カミンは深刻な表情でしばらくダコスの顔を見ていたが、やがて、ぼそりとまるで自分も息ができないほどの傷を負っているかのような苦しそうな声で呟いた。そんなカミンをダコスはあっけにとられたような顔で見つめる。

「何だ、それは…」

何かいいかけたダコスだが、カミンの真剣な藍色の瞳をじっと見ていると自分の中に秘めているもの全てが見透かされるようなそんな恐怖を覚え、ダコスは無意識のうちに目をそらした。

「頼む、教えてくれ」

カミンは今やダコスの前にひざまづき、頭をさげて懇願した。しかし、ダコスは目を合わせようとはしない。

「バカな。私が・・・お前に答えるとでも思っているのか」

この後に及んでも話をそらそうとするダコスの態度を見て、今まで冷静を装っていた自分がだんだん苛ついてきているのに気が付く。

「答えろ。貴様は一体、ナユルの何なんだ？」

カミンは無意識のうちにダコスの胸倉を掴んで乱暴に問い詰める。その藍色の瞳がきらりと涙で光った。今やカミンは泣いていた。これはナユルの哀しみなのか、それともダコスが必死に隠そうとしている弱さなのか？自分がなぜ泣いているのかカミンにはわからなかった。ただ、乱暴な言葉遣いをしなければ、カミンの心は哀しみで押しつぶされてしまいそうだった。

ふと、ダコスの薄い唇が緩み、その亜麻色の瞳が優しく微笑んだように見えた。その瞬間、カミンは腹の辺りに熱い衝撃を感じた。自分に何が起こったのかわからず、カミンはじっとダコスを見つめる。大量の出血で今や青黒い顔をしたダコスが不気味な形相で薄ら笑いを浮かべている。

「お前のような、若造に・・・いったい何がわかる」

ダコスはもうかすれてほとんど聞き取ることができないような小さな、しかし、妙にしっかりした声で言った。

カミンが自分の腹部を見ると、留まることを知らない湧き水のように、戦いで薄汚れた上着に真っ赤な染みが広がっていた。

「お前の・・・負け、だ」

ダコスの最期の言葉だった。

第九章：カミン・タイラー（3）

その日の夜、満たちは早い時間から各々自分の部屋にこもっていた。皆、今日カミンから聞かされた真実を自分なりに考えたかったからだ。

カミンから聞いた話は正直言って信じられない、いや、信じたくない話だった。結局カミンは噂が真実だったのか、突き止めることはできなかった。

だがもしそれが真実だとしたら…。ふと満は思い、自分の考えを跳ね除けるようにぶんぶんと頭を振った。

例え自分たちが完全なる悪だと信じて疑わなかったダコスに正当な理由があったにせよ、それに一体なんの意味があるというのだ。どんな理由であろうと、ダコスが紅劉国を滅ぼそうとしたのは事実だし、今なお勇希を狙っていることに変わりはない。

例えナユルがダコスの実娘だとしても、ダコスのしたことは正当化されるものではない。自分たちが仕えたのは皇女ナユルであり、今もその生まれ変わりである勇希を護らなくてはいけないことに変わりないではないか、というのが満の結論だった。

「ただわからないのは・・・」

満は誰もいない部屋で一人呟いた。

「もし本当にナユルがダコスの娘だとしたら、やつは今一体勇希を捕らえて何をしようとしているのだ？」

満はどすん、とその巨体には似つかないような小さなベッドの上に疲れた体を沈ませるとじっと部屋の天井の一角を見つめる。

その答えは、カミンも知らなかった。カミンが知っていたことは、カミンが勇希と体を共有しているのはダコスの仕業ではない、ということだけだった。ただ、それ以上そのことについて、詮索してほしくない、そうカミンは言った。そして、今日自分から聞いたことは勇希には決して話さないでほしい、そう言い残しカミンは行ってしまった。

結局全てが振り出しに戻ったことになる。一連の事件の発端は、おそらくダコスがその昔、紅劉国から追放されたことから来ているに違いなかった。そしてきっと、ダコス以外には誰にも理解できないことなのだろう。

「とにかく、俺たちは俺たちが信じることをやる。それしか道はなさそうだな」

何があってもナユルは俺が護る、そう言い切ったカミンの真剣な眼差しを思い出す。

自分たちが五大戦士だった頃から、もうだいぶ時が経っていた。それなのにカミンのナユルへの気持ちは何一つ変わっていなかった。それどころか、カミンはナユルの出生の秘密の噂を知って、それでも尚、自分の愛を貫こうとしている。満にはそんなカミンが少しうらやましくもあった。

「俺には、あんな風に女性(ひと)を愛しつづけることなんてきっと、できない」

ふ、とため息がもれる。哀しくもあったがそれが満の性格だった。好きな人がいても臆してしまう。だから、余計にカミンには幸せになってほしい、そのためなら何でもしよう、そう満は思う。それが、自分の幸せなのだ、と。

満は自分の胸につかえていた何かがすっと消えていくのを感じると訪れた睡魔に身を委ね深く長い眠りに落ちていった。

第十章：奇葎梗平

その頃、梗平はある目的のために一人、黙々と計画を実行する準備を整えていた。ルシファーの襲撃の時、梗平は初めて伝説の五大戦士の一人であるカミンの姿を見た。その姿を見た途端、体中に今まで感じたことのないような戦慄が走った。

ダコスから聞いてはいたものの、梗平にはただの逸話に出てくる人間にしかすぎなかったカミンが本当に存在し、しかも普通の人間としてではなく、精神体として存在していたことは大変なショックだった。もちろん、自分が仕えている師の言葉を疑っていたわけではない。ただ、梗平は輪廻転生とか、魂といったことをなんだか胡散臭く感じていた。全ての生きているモノはその一生を終えると無に帰る、それが梗平の考えだった。

真津子たち他の四人は確かに普通の人とは違う能力を兼ね備えている。そして、真剣に自分達は昔の英雄の生まれ変わりだと信じて疑わなかった。だが、それがなんの証拠となるというのだ。自分達が信じている前世が本当に自分達のものだと、どうして言える？

梗平は自分の部屋の粗末な洗面台にしつらえられている薄汚れた鏡を見た。そっと梗平が目元に手を当てて何かをはずす。曇った鏡の中、奇妙な光を放つ、爬虫類を思わせるような薄気味悪い黄色い瞳が梗平を見つめていた。

＊＊＊＊

梗平は普通の人間の、普通の子供として生まれた。もちろん前世の記憶など持ち合わせてもいないし、特別な能力を持っていたわけでもない。ごくごく、平凡な子供のハズだった。その、風変わりな容姿を除いては。

梗平が生まれたのは小さな片田舎で、人口も三千人という、今や過疎化がひどく進んできている農村だった。家は貧しく、両親は自分達の田畑を持っていなかったので、近隣の農家のうちを手伝って毎日の生活を凌いでいた。梗平には兄一人と妹二人がいたが、誰一人、梗平のような瞳を持って生まれた者はいなかった。

梗平が生まれた時、親類の者は皆、口をそろえて生まれたのは悪魔だと言って梗平を捨てるよう、まだ若かった夫婦に言ったそうである。このままでは一家にたたりが来ると。

梗平の両親はすぐにはその助言を聞き入れようとはしなかった。何せ貧乏な家である。いずれ働き手になる男の子は多いに越したことはなかったのだ。いくらなんでも今の世の中、そうそうたたりなどあるはずがない。大切に育てれば、きっと親の気持ちに報いてくれる時がくる。

そう、考えたのだ。

実際、梗平はあまり手のかからない子供だった。物心つく頃にはよく三つ違いの兄の後ろをぱたぱたと短い足でついてまわっては、よく言うことを聞いて家の簡単な手伝いをするようになっていた。

ところが、数年後、双子の妹ができてから状況は少しずつ悪いほうへと変わっていった。梗平の奇妙な黄色の瞳は幼い赤ん坊を怖がらせ、子守りなどできる状態ではない。その年は日照りが続き凶作で梗平の村は一気に貧乏になっていった。不幸はそれだけではおさまらず、原因のわからない疫病まで流行る始末。梗平の親類縁者はもちろん、近隣に住む人々も次々と病に倒れ、そして死んでいった。

そうなると、必ずこれはたたりだなんだ、と騒ぎ出す者がいるもので、しばらく忘れられていた梗平の奇妙な瞳がまた問題にあがってきたのである。やはりあの子は悪魔の申し子だったのだ。早くなんとか手を打たないと、村全体が呪い殺されてしまう、と。

あの時の両親の顔は今でも梗平の脳裏に焼きついて離れない。恐怖と嫌悪の入り混じった、自分を見る、あの冷たい瞳を。

「命だけは助けてやる。だから家族には、この村には二度と近づくな」

それが、梗平が両親から聞いた最期の言葉だった。急に自分の目が熱く感じると眩しい光が差し込んで何も見えなくなってしまった。何が起こったのか、その後、自分の両親や家族がどうなったのか全く覚えていない。

気が付くと、梗平はダコスの屋敷にいた。何が起こったのか、どうして自分は今ここにいるのか、梗平の問いにダコスは何も答えてはくれない。ただ、抑えきれない寂しさに身を震わせていると、ダコスはどこからともなく現れて声もなく泣く梗平の頭を優しく撫でてくれた。

この人は、何も言わなくても自分のことをわかってくれる、そう梗

平は思った。どうして自分を助けてくれたのか、なぜ何も聞こうとしないのかわからない。だけど、自分はこの人の恩に報いよう。たとえそれが、馬鹿げた夢想の為であったとしても・・・。

＊＊＊＊

次の日、勇希は一人で診療所の掃除をしていた。診療所と言っても名ばかりで、どちらかというと山の中のコテージというような小さなかわいい造りの家である。もともとは真津子の父、眞の別荘で、見た目は小さいが、中は５ＬＤＫでこざっぱりとした家具で纏められていた。

真津子と満は流クリニックのほうに他の子供達の様子を見に朝から出払っていた。敬介は勇希の顔を見るなりやぼ用を思い出したとか言ってやはりバイクでどこかへ行ってしまった。

みんなが自分を避けていることは勇希にも容易に理解できた。きっとカミンのことである。昨夜、真津子たちはカミンと話ができた、と言っていたが今はそれぞれ自分の考えを整理しなければならないから、何を話したかは教えられないと言う。きっと勇希には言いにくいことなのだろう。勇希はなんとなくそんな予感がしていた。だからこそ、あんなに躊躇っていたのだ。

「ま、考えていても仕方ないか」

勇希は手持ち無沙汰だったので、掃除でもすることにしたのである。

どのくらいたっただろうか、勇希がリビングに掃除機をかけていると裏の林に面した大きなガラスのドアをコンコンと叩く音がした。ふと顔をあげると外のテラスに梗平が立っている。

「あら？梗平君じゃない」

掃除機のスイッチを止めるとドアのほうへと向かう。背後でつくもが眠そうに目をこすりながら寝室から出てきたことに、勇希は気付いていなかった。

勇希がガラスの引き戸を開けると眩しい陽の光が差し込んで勇希は思わず目を細めた。

「やあ。何してるの？」

梗平は相変わらず人なつこい笑顔で勇希を見上げた。

「暇だったから掃除してたの。梗平君こそどうしたの？」

勇希は数日前から梗平の姿がなかったので流クリニックのほうに帰ったと思っていたのだ。

「う～ん、クリニックのほうに帰ってたんだけどね、退屈しちゃってさ。他のみんなは？」

「みんな出払ってるのよ。つくもはまだ、寝てるみたいだけど・・・。ここまで一人で来たの？ここには車じゃないとこれないんじゃ・・・」

勇希がふと不思議に思って聞くと急に梗平はあわてたようにその言葉を遮った。

「あのさ、勇希ちゃんに見せたいものがあるんだよね。ちょっとすぐそこなんだ。一緒に来てよ」

平静を装う梗平の瞳が勇希の背後に突っ立っていたつくもに止まる。その瞳は人なつこい笑顔とは対象的に凍て付くような冷たい光を帯びていた。

「そんな急に言われても・・・」

戸惑う勇希の言葉など気にせず梗平は勇希の腕を無理やりひっぱると外に連れ出した。

「はあ。もうちっとうまく連れ出せないのかしらね」

つくもは二人が林の中に消えていくのを見届けると引き戸を閉めて鍵をかけた。

＊＊＊＊

「なんですって？」

いつも冷静な真津子が素っ頓狂な声をあげる。

思っていたよりも事務の仕事に時間がかかってしまい、二人が診療所に戻ってきたのはその日の夜遅くだった。帰ってきてみると、い

つの間にかいなくなっていた梗平がつくもとリビングでなにやら話している。その後ろの長椅子には、いらついた様子の敬介がしきりに貧乏ゆすりをしながら顔を両腕の中にうずめて座っていた。

真津子たちに気付くといつになく心配そうな顔のつくもが事情を説明する。つくもの話では、今朝梗平が突然来て裏の林にある湖を見せようと勇希を連れ出したと言う。その時、急に勇希が他の人格に変わったというのだ。

それがカミンであることは皆知っていたが、詳しい事情を知らない梗平は勇希が精神分裂症にでもなったと思い込み、近くの病院に運び込んだ。そして、今はその病院の監視下にあるので勇希はこの診療所に戻れない、と言うのだ。

「なんてこと、してくれたの」

真津子はあまりの怒りに眩暈を感じてその場に座り込んだ。

「お前は一体どうしてここにいるんだ」

一部始終を無言で聞いていた満は真津子をそばの椅子まで連れて行くと、それまで渦巻いていた質問を梗平に浴びせた。

梗平は一瞬はっとして満の灰色の瞳を見つめる。この男に下手な嘘は通じない、そう直感した梗平は言葉に詰まってたじろいだ。

「そ、それよりも、今は勇希を連れ戻すことのほうが先決なんじゃないの？」

つくもがまるで助け舟を出すように提案する。

「でも、どうやって？医者を説得するには時間がかかりすぎるわ」
職業柄、精神科医をよく知っている真津子は絶望の声をあげる。
「忍び込むしか、ないだろ」
それまで黙っていた敬介が搾り出すような声で呟いた。
「忍び込む？」
真津子は思わず鸚鵡返しの返事をする。
「ああ。今夜、病院に忍び込んで勇希を連れ戻す。それしか方法はない」
「だが、相手は病院だ。夜中に忍び込んだとしても夜勤の者が多くいるのではないか？」
満は冷静に答える。
「多少、てこずるかもしれないが、このままじっと待つ、というわけにはいかないだろう？」
敬介は今にも飛び出さんとばかりにまくし立てた。
「僕も、その意見に賛成です。僕の勘違いでこんなことになっちゃって。僕がなんとか連れてかえります」
梗平は愁傷な顔でそう言ったが、満は首を横に振る。

「いや、お前はここに残れ。勇希救出には俺達だけで行く」

満の言葉に他の三人も頷いた。

第十一章：敵の本拠地へ

梗平から聞いたその病院は、診療所がある森のさらに奥深いところにあった。病院というわりにはこじんまりとした平屋建てで壁には蔦のようなものが這っている。灯りはひとつも点いておらず、柔らかな月の光にかすかに照らし出されたその建物はまるでお化け屋敷かなにかのようだ。

「マジでこんなところが病院なのか？」

敬介はかすれた声で呟いた。

「さあ、本当の病院じゃないでしょうね」

真津子が妙に落ち着いた声で答える。

「じゃあ・・・」

「おそらく、敵の罠だろう」

敬介が次の言葉を発する前に満がやはり落ち着いた低い声で答える。

「げっ。敵の罠って、まさかそれを最初からわかってたって言うんじゃあ・・・」

「当たり前だ」

今ごろ気付いたのか、と満は少しあきれたようにちらっと横目で敬

介を見る。

さっきの元気はどこへ行ってしまったのか、敬介はなさけない顔をして深いため息をついた。

「どうした？」

満はじっと辺りの様子を伺いながら小声で聞く。

「どうしたって・・・。まさか、出たりしないだろうなあ？」

今にも泣き出しそうな敬介の声で満は気がつく。敬介は『お化け』が苦手なのだと。

「そんなに怖がらなくってもあたしがついてるから大丈夫だよ」

敬介のすぐ側にいたつくもが頼もしい声でそっと囁いた。

「な、誰が怖がって・・・ふが、ふが・・・」

本当のところをずばりつかれて顔を真っ赤にした敬介が思わず大声をあげそうになったので真津子が素早く敬介の口に手を押し当てた。

「しっ。静かになさい。敵に気付かれるじゃないの」

小声でたしなめられると何も言えずに敬介は目で横にいたつくもを睨み付けたが、この暗闇ではほとんど効果はない。つくもはそしらぬふりをしていた。

「行くぞ」

満の一声でそっと建物の脇にあった関係者用のドアから一行は建物の中へと忍び込んだ。

＊＊＊

建物の中は外よりも更に真っ暗でほとんど何も見えない。しばらく目が暗闇になれるのを待っていると、どうやら受付らしい部屋にいることに気付いた。

「こ、ここは・・・」

真津子が小さく驚きの声をあげる。その声に反応したかのように満も辺りを見回して絶句した。

「何？どうしたの？」

状況が把握できないつくもが小声で聞いてくる。

四人が忍び込んだその場所を真津子と満はよく知っていた。そこは・・・。

「ここは流クリニックの受け付けじゃないか」

満が低い声でうなるように呟く。

暗闇に馴れた目に飛び込んできたその風景は紛れもなく、真津子と満が寝起きし、仕事場にしている流クリニックだった。

「なんですって？」

つくもは思わず聞き返す。だが、その問いに答える暇はなかった。

突然、大きな爆発音のようなものが建物の奥から聞こえてきたのだ。四人は咄嗟に走り出していた。

勇希が危ない。直感的にそう感じたのだ。早く、早く駆けつけなければ、そう焦れば焦るほど、足がもつれて思うように進まなかった。

外から見た時は自分たちが今寝泊りしている診療所よりも更に小さく見えたはずなのに、暗く長い廊下はいっこうに途切れる気配がない。いったいどこまで続いているんだ、そう敬介が苛立ち始めたとき、前方にドアのようなものが見えてきた。

半分ほど開いたドアの隙間から時折、薄暗い蛍光灯の光が漏れていた。どうやら電球が切れる寸前らしく、その青白い光はちかちかとせわしなく瞬きをしている。中ですっと人影のようなものが動いたように見えた。

「あそこか！」

さきほどお化けを怖がっていた人間とは別人のように息巻いた敬介が、勢い良くそのドアを押し開けた。

「！！」

そこには確かに勇希がいた。勇希は気を失っているのか狭い病院のベッドの上で固く目を閉じている。そのベッドの周りには人影が二

つ。

一人はあの中華屋で襲ってきたルシファーで相変わらず青白い顔で勇希を見下ろしていた。もう一人は後ろを向いているのですぐには誰なのかわからない。

だが、その背中には見覚えがあった。こちらに背を向けて立っていたその影がゆっくりと敬介たちのほうを振り向く。

「梗・・・平？」

敬介が困惑した声で呟いた。

背の低い小柄な人影は診療所に残してきたと思っていた梗平だった。

「梗平、てめえ、こんなところで何してやがるんだ？」

敬介がいつでも飛びかかれるように体制を整えながら怒りに燃えた声で叫んだ。

まさか梗平が俺たちをだましていたなんて。真津子が始めて梗平に会った時、すんなり仲間に入れることを危惧していたのはこのことだったのか。いとも簡単に騙されてしまった自分の甘さに敬介は腹がたった。

そんな敬介をつくもは冷静に見つめながら自分も腰にさげていた剣のつかに手を伸ばす。

「おやおや、どうしたのさ、そんな怖い顔して」

対して梗平はしれっとして涼しい声で答えた。

「勇希に何をした？一体お前たちは何を企んでいるんだ！」

敬介は今にも掴みかからんばかりに叫ぶ。その顔は怒りで真っ赤になっていたが、ふと梗平の雰囲気がいつもと違うことに気が付く。

「お前、その瞳・・・」

敬介が動揺した声を出す。

「言うなっ！」

今度は梗平のほうがムキになる番だった。

「何をもたもたしている？」

そこに新しい声が加わった。いつの間にかルシファーの後ろにぽっかりと大きな穴が開いていて、そこから一人の長身の男が入ってきた。

その男の姿を見ると真津子は驚きにその紫の瞳を見開いた。

「父さん？！」

その長身の男は紛れもない真津子の父親で満の上司、流眞その人だった。

「流さん・・・いったい、一体これはどういうことなんですか？！」

満も予期していなかった上司の登場に困惑した様子で尋ねる。

「加瀬君か・・・君にはクリニックのことを任せていたが、他のことにも口出ししてよいとは言っていないぞ」

眞はいつもの静かな口調で答える。

「こ、こんなところで何してるの？」

真津子もショックを隠しきれない様子で口篭もりながら目の前にいる父に問い掛けた。

「悪いが、真津子、今お前達にかまっている暇はない。梗平、いや、ラナ、こいつらの始末はお前にまかせた。ルシファー、行くぞ。ダコス様が待っておられる。」

そう言うと、眞はさっと踵を返して背後の穴の中へ消えていく。それを追うように、ルシファーも勇希をベッドから抱きあげると暗闇の中へと音もなく消えていった。

「あっ、父さん！待って！」

我に返った真津子が少し間を置いて父が消えた穴へと走りよる。

「真津子、待て、俺も行く」

満はそう言うと真津子を追って穴の中へと消えていった。

残った敬介とつくもも跡を追おうとしたが、その前に梗平が立ちはだかった。

「梗平、てめえ、どきやがれ！」

敬介が毒づく。

「そう言わないで、僕と遊んでくれよ」

いつもの甘ったれたような声でそう言うと、梗平はにやりと唇の端を歪めて微笑んだ。

梗平の瞳は今や敬介たちが知っている褪めた青色ではなかった。へびのような細い瞳孔が黄色い瞳の中でせわしなくその形を変えている。お化けの次に爬虫類が苦手な敬介は無意識のうちに後ずさりしていた。

「ラナ、お願いだからここを通して」

つくもが始めて口をきく。

梗平、いやラナと呼ばれる男の黄色い瞳がつくもを睨むと嫌味の含んだ声でのしった。

「おや、セラじゃないか？この後に及んでまだ芝居を売っているのか？お前も僕達の仲間のくせに」

「な、に？」

ラナの言葉に敬介がたじろぐ。

そんな敬介をさも面白そうに眺めると、ラナはもったいぶったように説明する。

「そうさ、こいつはセラ。ああ、昔はクルツとも呼ばれていたっけ

？僕達ダコス様の間では有名な裏切り者さ。（ダブル・エージェント）」

第十二章：真実と偽り（1）

その頃、真津子と満は暗闇の中、眞とルシファーの跡を追っていた。穴の中はまるで暗い洞窟のような造りだったがところどころに置かれている松明の灯りで先程いた建物の中よりは足元が見えるようになっていた。

あともう少しで眞たちを捕えられる、そう思ったとき、ふいに数十人の小さな子供達がどこからともなく二人の前に現れた。一瞬の出来事にたじろいで歩を止めた真津子たちに子供達が容赦なく襲い掛かってくる。

「なっ！」

真津子は例え敵であろうとも子供に向かっては手が出せない。なんとか相手を傷つけずに振り払おうともがいたが子供達はあっという間に真津子を地面に押さえつけてしまった。

「真津子！」

満は片っ端から真津子にのしかかっていた子供を乱暴につかんで引き離すと真津子を自分の背にかばうようにして立った。

「なんだ、お前はかわいいクリニックの子たちにまで手をあげる気か？」

ふと、男の声が聞こえる。子供達の後ろには真津子の父である眞が

一人、立っていた。

「クリニックの子供、だと？」

その言葉に満は自分の前にいる数十人の子供達の顔をまじまじと見つめるとはっと息を呑んだ。真津子も満の後ろからそっと覗き込んで絶句する。

確かに二人はその子供たちを知っていた。その子たちは眞があちこちから保護を目的に集めてきたクリニックに住む子供達だった。

だが、いつもと様子が違っていた。皆魂が抜けたかのように無表情であらぬ方向を見つめている。

「父さん、一体これは、どういうことなの？」

真津子は半ば発狂したように叫んだ。

「どうってことはない。ダコス様が目的を果たされるよう、私は手助けをしているだけさ」

眞は相変わらずしれっとした態度で答える。

「ダコスを、助ける、だと？何故だ？なぜ、自分の娘の敵を助ける？！」

満の言葉が終わるか終わらないうちにまた子供達が襲ってきた。咄嗟に満が突風を吹かせ、その強い風に吹き飛ばされた子供達は次々と周りの壁へ激突すると動かなくなってしまった。

「満！やめて、みんなが死んじゃう！」
真津子が満の腕を掴んでやめさせようとしたが満は攻撃の手を休めない。
「真津子、こいつらはもう既に生きてはいない。あのウェイターのように取り付かれて操られているだけだ」
満はそう言うと最後の子供が動かなくなるのを待ってその手を下ろした。
「ふん、真実を見破るとは、さすがだな。」
眞は満のほうへゆっくりと歩み寄った。
「流さん、こんなことはもう止めるんだ。あなたが何故、ダコスを助けているのかは知らない。だが、こんなことをして真津子が幸せになるとでも思っているのか？」
満が説得しようと動いた時、倒れていた子供達がふいに宙に浮かび上がると一斉に満へと襲い掛かってきた。突然のことに足をすくわれた満は今や完全に押さえつけられて身動きがとれない。真津子も同じようなものだった。
「いい格好だな、加瀬君。君が私に説教するなど、百年早いのだよ」
そう言った眞の手には松明の光で怪しく光る大きなサバイバルナイフが握られていた。
「いつか死の淵で会おう」

サバイバルナイフを振りかざしながら眞は不気味なほど静かな声で言った。その時、何か黒いものが真津子目掛けて飛んできた。

「！！」

真津子の甲高い悲鳴が薄暗い空洞にこだました。

＊＊＊＊

「ダブル、エージェントだって？」

敬介は自分の耳を疑った。

まさか、つくもが、自分の恋人が今まで自分を、仲間を裏切ってきたというのか？そんなはずはない。つくもは口は悪いがいつも仲間のために一生懸命だったはず。敬介はそう自分に言い聞かせる。

だが・・・。だが今までのつくもの言動にいくつか不信な点があったことも確かだ。

敬介が診療所に戻った時、つくもは梗平とリビングにいた。つくもの説明では知らない間に梗平が一人で勇希を連れ出し、病院へ収容したということだった。

だが、診療所は車がないとどうにもできないような場所にある。そして今敬介たちが忍び込んだこの建物は満が運転する４ｘ４で約三

十分もかかるような場所にあった。梗平が一人で勇希をこの場所に連れて来られるはずがない。そうなると、きっと共犯者がいるはずなのだ。

もし本当にここが病院だったとして、梗平が助けを携帯で呼んだとしても、診療所にいたつくもに全く気付かれずに勇希を連れ出すなど、ありえない。ましてや梗平が言うとおり、勇希が違う人格、つまりカミンに変わったというのであれば、カミンが素直に梗平の言うことを聞いてこんな所に収容されるはずがない。

ならば、やはりつくもは全てを知っていたのか？つくもが裏で手を引いていたから、勇希たちの行方があんなにあっさりと知られてしまっていたのか？そう考えると全てつじつまが合う。

ふと、つくもを見るとどこか怒りを無理やり抑えているような、それでいて今にも泣きそうな複雑な顔をしてその場に立ち尽くしていた。

つくもはそんな敬介の視線を無視すると、妖しく光る剣をラナに向けた。

「そんなことより、例の鍵を渡してもらおうか」

つくもは男言葉になると冷ややかな有無をも言わせぬ力強い声でそう言った。

「鍵、だって？」

まだ呆気に取られている敬介がわけがわからないと言った風に首をかしげる。

「おや、この鍵を僕が持っていること、知ってたんだ？」

そう言ってラナが胸元に光っていた鎖を引き出すと、大昔に使われていたような錆付いた鍵が見える。

「それって・・・」

「そう、僕が勇希ちゃんから盗んだものさ。黄泉（よみ）の国へ通じる扉のね。」

「じゃあ、お前が」

「ああ、そうさ。あの日、勇希ちゃんを灯台の書庫に閉じ込めたのは、僕。殺すのには失敗しちゃったけど、どうやら彼女、生きててもらわないとダコス様も困るらしいから、誘拐させてもらったんだ」

ラナは相変わらずかわいい子供のような声で悪びれもせずにそう答える。

「まんまとハメられてたってわけかよ、ちっくしょう。」

敬介は今にも地団駄踏みそうになりながら二人を睨んだ。

「ラナ、鍵を」

そんな敬介のことなど全く眼中に入っていないようでつくもは再び鍵を手渡すようラナを促す。

そんなつくもをまるで毒虫かなにかを見るような目で見ると、ラナはぱちんと指を鳴らした。その音に呼ばれたのか、敬介とつくもの

前にルシファーがどこからともなく現れた。

「鍵は僕のものだ。裏切り者などに渡すわけにはいかない」

そうラナが言うと同時にルシファーが二人に襲い掛かってくる。敬介とつくもは素早くその攻撃を避ける。ルシファーの攻撃はとても素早く、二人は回避するのがやっとでなかなか反撃できなかった。

つくもでさえ、たった数分の間の攻撃に肩で息をしながら剣を支えにしないと立っていられないほどその体力を使い果たしていた。そしてとうとうつくもの剣はルシファーの攻撃に弾き飛ばされてラナの側の地面に突き立った。

「こいつ、なんて身軽なんだ・・・まるで・・・」

敬介が息を切らしながら、呟く。

「まるで、カミンじゃないか！」

そう敬介が呟いた途端、ルシファーの体がびくんと引きつった。

「まさか、そんな・・・」

何か言いかけたつくもの前でルシファーの骸骨のような細い体がまるで発作でもおこったかのように激しく痙攣する。同時にルシファーのひどく痩せた背に力なく垂れていた長い緑色の髪が左右へと激しく揺れていた。

「くそ。失敗だったか！」

ラナは歯軋りするとつくもの剣を持ってルシファーの背後からつくも目掛けて襲い掛かってきた。

「つくも、危ない！」

敬介がつくものもとへ走りよろうとしたその時、ルシファーの細い体が隼のように素早く動いたか、と思うとその体にラナが持っていた剣が突き刺さった。

「！！」

息を呑む敬介とつくもの前で負傷したルシファーが見る見るうちにその姿を別のものに変えていく。

「き、貴様、まさか、そんな！！」

ルシファーの藍色の瞳に驚愕に顔をゆがませたラナの情けない顔が映っている。ルシファーの細い骨と皮ばかりの手には先程までラナが首からさげていたあの鍵がぶらさがっていた。

「消えな」

どこかで聞いたような深くどこか優しさの漂った声が響くとルシファーの掌から青い光がほとばしる。ラナの断末魔の叫びはその青い光の中に消えていった。

第十二章：真実と偽り（2）

暫く目をつぶっていた真津子はふいに自分を押さえつけていた者の手が自分の体から離れるのに気が付いて、そっと目を開けた。

子供達の体は地面の上に無数の屍のように倒れており、その中で一番体の大きな子供が蒼い液体を体から流して倒れていた。その傷口には眞が持っていたあのサバイバルナイフが突き立っている。

しばらく呆然と辺りを見回していると、倒れていた子供と思っていたものたちは次第に干からびたミイラのような姿にその容貌を変えていった。あのウェイターのように、もともと死人を操っていたのであろう。賢い真津子はすぐにその状況を理解した。

「うっ・・・ぐふっ」

苦しそうな声が聞こえてくる。その方向を見やると、腹部辺りを抑えてうずくまる父の姿が見える。指の間から真っ赤な何かが滴り落ちていた。

「父・・・さん?」

真津子は震える声で呼んだ。ゆっくり、真津子のほうを振り向いた眞は真津子が知っているいつもの優しい父親の顔でそっと微笑んだ。

「真津子・・・」

かすれた声で愛しい娘の名を呼ぶと眞の体はどさり、とその場に崩れ落ちた。

「父さん！！」

真津子はあわてて父の側に駆け寄った。満は少し離れたところで立ち尽くしている。

「父さん、しっかりして！父さん！」

真津子の叫び声にふと我に帰った満は急いで眞の側に駆け寄ると止血しようと試みる。だが、傷口から溢れ出した血は留まるところを知らなかった。

「血が、止まらない。このままだと・・・」

満は唇を噛みしめる。

「加瀬・・・君」

眞の声はそんな満をまるで労わるかのように優しかった。

「気にするな・・・私は、もうダメだ・・・。それより、娘を・・・真津子を、頼む」

「何言ってるの！」

真津子は弱気になった眞をしかりつける。

「すまない、私は、お前の期待に答えて・・・やれなかった」

いつの間にか眞の瞳には大粒の涙が光っていた。

「何が、一体何があったの。どうしてこんなことに・・・」

最後に真津子が父の姿を見たのは丁度勇希が灯台に閉じ込められた時だった。あの時、急な仕事が入ったと言って、眞はめずらしく行き先も告げずにクリニックを後にした。

たった数ヶ月見ない間に父はすっかりやせ細っていた。ふ、と自分の腕の中の父の体が軽くなった気がした。

「人間は死ぬとその体重が少しだけだが減るらしい。一説には魂の重さが抜けるからだと言われている」

昔、父がそう教えてくれたことを思い出す。

「父、さん」

真津子は細い体を振るわせて静かに泣き崩れた。

眞は結局、真実を何も告げないまま、最愛の娘の腕の中、永く深い眠りに落ちていった。

＊＊＊＊

敬介は言葉を失ってその場に立ち尽くしていた。驚きで腰が抜けたように動けなかった。こんな思いをするのは何度目だろう。ついさっきまで自分達を襲っていたルシファーは今や別人の顔で倒れていた。紺碧の髪に藍色の瞳、そしてあの、青い気弾。それは紛れもない、かつての仲間、カミンその人だった。

つくもは後悔にひざが震え、その場に崩れ落ちた。カミンは自分を、こんな裏切り者の自分を助けてくれたのだ。そう思うと、涙が止め処もなく溢れてくる。つくもは小さな子供のように泣きじゃくりながらカミンにすがり付いた。

「カミン！カミン！どうしよう、血がこんなに！」

動揺して何をしていいのか全くわからない。

その時、ふと誰かが優しく自分の頭をなでているのに気が付く。涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げると、カミンの優しい藍色の瞳がやわらかく微笑んでいた。

「大丈夫。こんなことで俺はやられたりしない」

確かにカミンの傷は深かったが、幸い急所を外れているようだった。

「どうして、どうして私なんかを助けたの？」

つくもはしゃくりあげながら、気が付くと、自分の身を呈して護ってくれたカミンのことを責めていた。

カミンはいつもの優しい微笑みを浮かべて答える。

「どうしてって・・・つくもは俺の仲間じゃないか」

「あんたが護るのはナユルで、私のことなんか・・・護ってくれないと・・・」

つくもはカミンの出血を止めようと震える手で自分の上着を傷口に押し当てた。

「何、言ってんだ」

カミンの眼差しはナユルを見るそれとは少し違っていたが、友を想う優しい眼差しでつくもを見つめていた。

「だって・・・あたしが昔、何をしたか、カミンは知ってるじゃない。それに今度だって、あたし・・・」

「駄目だ！」

突然、何か言おうとしたつくもをカミンがきつい口調で制した。つくもは驚いてカミンの藍色の瞳を見つめる。カミンがこんなにきつい口調をしたのを聞いたのは初めてだった。

カミンの瞳は何もかもわかっていると無言で言っていた。

「何も、言わないでいいんだ、つくも。君は俺の仲間で・・・そして、大切な友達だ。危険な目に会っている友達を助けるのは当然だろ」

カミンはいつもの穏やかな口調に戻るとそっと微笑んだ。

第十三章：最後の戦い

カミンとつくも、敬介、そして真津子と満は勇希の気を探りながら、それぞれ複雑に入り組んだ地下空洞を進んでいた。地下空洞のなかは不気味なほど静かで、壁にしつらえられた松明が時折かすかな風に揺らめいて、五人を音もなく静かに威嚇しているようにさえ見える。

皆、無言でもくもくと、まだ見えない敵へと向かって進んでいた。それぞれの胸にはいろんな感情が渦巻いていたが、皆に共通することはただ一つ。勇希を護るということ。ただその為だけに五人は今、全ての迷いを捨てて再びその力を合わせようとしていた。どれだけ歩いたのだろうか。

どこまでも果てしなく続くのではないかと思い始めたその時、目の前に蒼白い光が見えてきた。長い間暗闇を歩いてきた五人は眩しそうにその目を細める。

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

蒼白い光の中からハスキーボイスが聞こえてきた。

目の前に薄蒼色に揺らめく炎が灯った無数の燭台が見える。その中央には石造りの祭壇のようなものがあり、一人の長身の男がそのすぐ脇に立っていた。

男の切れ長の瞳が側の燭代の光を受けて妖しく輝いている。瞬きを

するたびに、きれいな長い睫が男の端整な顔に影を作った。

そのうるんだ亜麻色の瞳はこの世のものとは思えないほど美しく、その顔には性別を超えた不思議な色気さえ漂っていた。

肩から腰にかけて流れる髪は金色に輝き、地下空洞にただよう冷たい空気の揺らぎにあわせて静かに、まるで小川が流れているかのように柔らかに揺れている。

その体は野生の獣よろしく筋肉がバランスよくついており、かと言って、マッチョマンのような筋肉隆々でもない。

男の体には無駄というところが見当たらない。まるで完璧と言わんばかりのその肢体は若い女性向けのファッション専門雑誌の折込広告に載っている美容整形外科の写真のモデルに見られるような、どこか不自然なオーラが漂っていた。

「おっ、おっ・・・」

つくもの横で敬介が奇妙な声を出す。

「ちょっと、敬介、変な声出さないでよ」

つくもが腰の剣に手をかけながら横目で敬介を睨んだ。

「お前は・・・」

敬介の緊張した声にそれまで涼しげな顔をしていた男の顔が少し強張っている。

敬介はごくん、と一度つばを飲み込むと、「誰だっけ？」と急に間の抜けたような声で続けた。

この真剣な事態に全く緊張感のない敬介の発言に皆の闘志が一気に削がれる。

「あっ、あんたねえ、こんな時にもうちょっとまともなことは言えないの？」

つくもが剣を持っていない右手で頭を抱えた。

「あはは、だって、俺、仲間以外のことは今でもぜんっぜん思い出せないんだもん」

敬介は悪びれもせずにへらへら笑っている。

「まったく」

真津子も今更ながら敬介の能天気さにため息をついた。

「あれが、ダコスだ」

いつも一人だけ敬介のぼけに動じない満が真面目な顔で答える。

「それに・・・勇希も」

静かな、だがその奥に怒りを秘めたカミンの一言に一同ははっとなって敵のほうを見た。

先程はダコスのあまりにも世俗離れした容姿に気を取られて気付かなかったが、祭壇の上に人らしきものが寝かされている。目を凝ら

してよく見ると、それは皆が良く知っている紅劉国の皇女だった。
彼女の長い栗色の髪は燭代の光を浴びて金色に輝いている。その目は堅く閉じられ、いつも薔薇色に染まっている勇希の頬は白くこころなしかやつれていて、蒼白い燭台の炎の揺らめきのせいでまるで生気が感じられなかった。

「まさか・・・」

真津子が何か言いかけてやめる。

「勇希に何をした？」

代わりにカミンが尋ねた。

満はカミンが勇希と別の人間としてそこにいるのに不信を感じたが、そんなことを問うている時間はない。とにかくここは勇希の救出、それだけに集中しろ、そう、自分に言い聞かせる。
ダコスはにやりと男性にしては赤い唇を歪ませる。

「何って、お前は知っているだろう、カミン。お前に取り付かれていたようだったのでね。除霊したんだよ。我が儀式の最中にお前が出てきては困るからね。だが、肝心な鍵を持っているはずのラナがなかなか来なくてね。待っていた、と言うわけだ。だが、驚いたよ。お前の魂はルシファーの体の中に封印したはず。どうやって出てきたのだ？いや、どうやってルシファーの体を乗っ取った、と聞いたほうが適切か」

ダコスはカミンの藍色の瞳を真直ぐに見下ろしながら妙に穏やかな声でそう言った。

「ルシファーの体を？」

満が驚いてカミンを見る。髪の色もその顔も、カミンのものだったので気が付かなかったのだが、確かによく見ると、その体はカミンのものにしてはひどく痩せてたよりなかった。そのわき腹あたりには、布切れのようなものが巻いてあり、赤黒い染みになっている。

「カミン、あなた、怪我、してるの？」

真津子も満と同じことに気が付いたらしかった。

「たいしたことはない」

そう、カミンは顔を一時もダコスから離さず答えたが、その顔色は血の気が引いて真っ青で、今にも貧血で倒れそうに見える。だが、体の状態とは裏腹に、カミンの瞳は精気で満ち溢れ、ダコスへの怒りで燃えていた。

「儀式は、この鍵がないと始まらない、そう言うことね？」

つくもが自分の首にさげた鍵を見せる。その言葉にダコスは綺麗な切れ長の目を細めた。

「そう、それだ。さすがはセラ。我が腹心よ。さあ、それをこちらに・・・」

「嫌よ」

鍵を求めて近づいてきたダコスの言葉を遮ると、つくもは鍵をすっ

と自分の胸元へしまい込んでその身の丈ほどもある剣を構えた。

「まさか、今更我を裏切る、というのではあるまいな？」

ダコスが少しだけ顔色を変えて、困ったような顔をする。

「その、まさかよ。はあっ！」

つくもは言い終わるが早いか、そのままの姿勢でダコスめがけて突っ込んでいく。それが合図とばかり、他の四人も体制を整えるとダコスに対して攻撃を始めた。

だが、ダコスのほうが五人よりも上手である。なかなかダコスの防御壁を破ることができない。

「ちっくしょう、なんとかならないのか！？」

敬介が歯軋りする。

「強すぎる、このままじゃ・・・」

自分の攻撃を涼しげにすり抜けていくダコスにつくもも苛立ちを感じていた。

「なにか、方法を・・・」

そう真津子が言いかけたとき、どこからか誰かの囁く声が聞こえてきた。

『みんな、よく聞いてくれ』

それは紛れもないカミンの声だった。カミンの声は耳から聞こえたものではなく、皆の頭の中に直接響いていた。カミンが注意深く、ダコスを倒す計画を皆に指示する。その指示を聞き終えた途端、皆の動きが一瞬だけ止まった。

『躊躇するな、これしか方法はない』

皆の心を読み取ったカミンの声が頭の中に力強く響く。

「いくぞ！」

カミンの一声が皆の心を一つにする。

満は全身の力を込めて強風をダコスへ向けて煽る。すさまじい風に燭代は倒れ、その蒼白い炎が地下空洞のあちこちへと飛び火した。ダコスの注意が満に向く。その合間にカミンの気弾と敬介の電光がダコスを絶え間なく襲った。真津子はその一瞬の隙に勇希が寝かされている祭壇にテレポートすると勇希と一緒に安全な範囲にまで移動して自分の周りにできるだけ強力な結界を張った。

勇希が無事救出されたのを見届けたカミンは真津子たちのほうに向かって動いたダコスへと最後の力を振り絞ってその青い気弾を投げつけた。

「ぐっ」

初めてダコスの口から苦しそうなうめきが漏れる。

「貴様―！！」

今やダコスの綺麗な瞳は真っ赤に血走り、鬼のような形相でカミンを睨みつけた。

その時、真津子がカミンの計画どおり、辺りに飛び火した炎を気で操るとダコスの周囲はあっと言う真に火の海で覆われた。満の操る風がその炎をさらに煽っていく。

「ぐおっ！」

真っ赤に燃え盛る炎の中でダコスは身動きが取れず身悶えた。

カミンがダコスへ向かって走る。はっとダコスが顔をあげるのと同時にカミンの青い気弾が輝いた。同時に、敬介の電光がカミンの体に直撃する。

「貴様、まさか・・・！」

ダコスがカミンの計画に気付いてその手を上げたその時、つくもの剣がその胸に深々と突き刺さった。

ダコスはその端整な顔に初めて驚愕の色を浮かべる。恐怖に見開かれたその亜麻色の瞳が捕えたのはルシファーの遺体を通したものではなく、その囚われていた体から解き放たれたカミン自信の魂だった。

＊＊＊＊

ふいに意識を取り戻した勇希は目の前の光景に自分の目を疑った。
それは一瞬のことに過ぎなかったが、勇希にはまるでスローモーションのフィルムを見ているように感じられた。
きれいな紺碧の髪が揺れている。均整のとれたその体に纏うそれは今では見ることのない昔の戦士のものだった。そして、勇希が愛する藍色に輝く一対の瞳。その瞳の持ち主の体は眩いばかりの青い光に包まれていた。

「きれい・・・」

勇希は無意識に呟く。
その瞬間、光に包まれた青年はダコスの体内へと消えていった。

「！！」

あまりの突然のことに勇希は何が起こったのかわからず、ただ息を呑んだ。
カミンの青い光がダコスの体の中へと消えていく。それと同時に、ダコスの周りに狂うように這っていた炎も消えてしまった。
ふっと、ダコスが含み笑いを浮かべる。

「何をするかと思えば、こんなものか・・・」

ダコスはさも可笑しいと言わんばかりに声を立てて笑った。

「まさか、失敗・・・？」

つくもが一瞬たじろいだその時、「ぐっ。なっ、バカな・・・」急にダコスが苦しそうな声をあげた。

ダコスの顔がみるみる恐怖に歪んでいく。

「やっ、やめろ！我はもうあのような場所には戻らない！離せ、カミン！離せー！！！」

ダコスがそう、大声で叫んだかと思うと突然その体がふたたびあの青い光に包まれていく。その光は次第に大きく眩しさを増していく。

「カミン！！」

勇希の悲鳴が地下空洞の中にこだまして、カミンの青い光がそこにある全てを飲み込んでいった。

第十四章：永遠の別れ

青い光が徐々に薄らいでいく。気が付くと勇希は梗平に閉じ込められたあの灯台の地下にある書庫のすぐ外に立っていた。書庫の内ではカミンが、勇希が輝く日記帳と大きな皮製の歴史書を見つけた、あの大きな古い机の前に立っている。

勇希と目が合うと、カミンは優しく微笑んだ。彼の全身は今うす青い光に覆われて、勇希にはまるで天使かなにかのように思えた。

満、真津子、つくも、そして敬介も勇希のすぐ後ろで事の成り行きを見守っている。誰一人、言葉を紡ぐ者はなく、ただ、仲間と皇女を見守るしかできない。

これから起こりうることをその場にいた誰もが感じ、それが現実にならないことを願ったが、その願いだけは叶わないことを、皆、心のどこかで知っていたのだ。

仲間が困っている時に助けられなくてなにが五大戦士だ、そう憤りを感じてもどうすることもできない。その気持ちに皆が皆、神妙な面持ちでその場に立ち尽くしていた。

「ナユル…」

カミンが優しく愛しい女性（ひと）の名前を呼んだ。

「鍵を…鍵を使うんだ」

カミンは傷の痛みをこらえながら、かすかな弱弱しい声でそう言った。

「鍵、を？」

勇希は静かに答える。

「そうだ。その鍵で全ての痛みを封印するんだ」

そう言うカミンに勇希は首を振ると「いや」と短く答える。

「勇希、お願いだ。俺にこの扉を封印する力を貸してくれ。ダコスを、ダコスの魂を黄泉（あ）の（の）国（世）へ連れて行く。そうすれば、もう二度と、やつが人を苦しめることはない」

カミンは悲痛な顔で、そう勇希に訴える。勇希は今度は首がもげそうなくらい激しく首を横に振る。

勇希にはカミンが自分に何をしてほしいのか、わかっていた。カミンだけが、ダコスをあの世へ連れていける、そして二度と陽の当たる所に出て来れないよう封印することができるのだ。だが、それと同時に勇希はカミンに架せられた運命も知っていた。

ダコスを黄泉の国へ連れて行くということ、それはカミンの死をも意味するのである。そんなことになれば、勇希はもう二度と、カミンと会うことはできない。それは、ずっと夢見ていた理想の男性（ひと）を失うばかりでなく、勇希にとっては自分の一部を失う、ということだった。

現世に生まれ変わってから、カミンは確かに勇希とともに生きてきたのだ。いつも話ができる訳ではなかったが、それでもいつもどこかにカミンを感じることができた。

それなのに、この世界を救うためには、ダコスだけでなく、古からずっとこの世界を救ってきたカミンの命さえも奪わなくてはいけない。そんなことが、勇希にできるはずもなかった。

「そんなの、私、できない！」

勇希は叫び声をあげた。

「ナユル…」

勇希はカミンの綺麗な藍色の瞳が悲しみで包まれているのに気が付いた。

「！」

そんなカミンの顔を見ていると、勇希は突然前世で起こったほんとうのことを思い出して息を呑む。そう、ここにいる他の仲間が決して知ることのなかった紅劉国滅亡の本当の理由…。

あれは勇希が紅劉国の皇女ナユルだった時だ。カミンは彼の誓い通り、確かにナユルと王国を救っていた。だが、凄まじい戦いの末、ダコスから勝利を勝ち取ったカミンはその代償として自分の命を失っていたのだ。

カミンの死はナユルの心を壊してしまった。ナユルの魂(みこころ)は紅劉国の魂(こころ)であり、ナユルの魂(みこころ)は紅劉国と同化していたのだ。ナユルの魂は心痛に犯され、自分の殻に閉じ篭ってしまう。

国王一族を愛して止まなかった国の民にナユルの心痛が届かないはずもない。それゆえに、ナユルの病んだ心は自分の体だけでなく、世界までをも壊してしまったのである。

勇希は昔のナユルに戻って泣きじゃくった。

「もう二度と、あなたを失いたくない」と。

「ナユル…俺の言うことをよく聞くんだ」

カミンの優しい声が勇希の壊れた心に染みていく。勇希はカミンが感じている痛みに心が締め付けられる思いで目を伏せた。

「俺は…俺は長い間、生まれ変わるのを拒んできた。国が、王国があんな風になってしまったのは俺のせいだから…」

「そんな！あなたは私と国のためにがんばった。精一杯私たちを守ってくれた。国を滅ぼしたのは、私」

勇希はカミンの言葉を遮ってそう叫んだ。

カミンの藍色の瞳に優しさとナユルへの想いが溢れていく。

「それは、違う。あれは、俺の、俺の責任だ。ナユル、俺は君と王国をあれで救ったと思っていた…だが、結局は君の心を砕き、ついには世界まで…。だから君の守護霊になった時、俺は決めたんだ。

もう、同じ過ちは二度としないと」

カミンは優しく微笑む。

勇希は昔、いつか同じ微笑を見たことがある、そうぼんやり考えていた。

「そう…忘れるわけが…ない」

勇希はそっと自分にしか聞こえないような小さな声で呟く。

それはカミンが初めてナユルに会った時に見せた笑顔だった。そして、その笑顔こそが、ナユルが恋した理由。

「カミン…」

ナユルはずっと夢に見ていた人の名前を呼んだ。

「俺は君を必ず護る。どこにいても、君とずっと一緒にいるよ」

勇希はカミンの藍色の瞳に映ったナユルの姿をぼんやり見ていた。

「でも、私、やっぱり…」

ナユルがまだ何か言おうとしたが、カミンはその言葉を遮る。

「ナユル、俺は君を信じている。君は今、俺が知っている昔のナユルじゃない。もっと強いはずだ。君は、奈波勇希だ。勇希、君ならこの世界を救うことができる。二人なら、必ず」

カミンの優しく、しっかりした瞳はもう誰に何を言われてもその意

志が変わらないことを勇希に告げていた。

「彼はいつも他の人のことを考えていた。全然、変わってない」

勇希はそう思うと、かすかに微笑んでみせる。そして意を決したようにしっかりうなずくと、つくもから例の鍵を受け取った。

勇希は銅製の大きな扉についた鍵穴へとその鍵を差し込んだ。扉はその鍵をまるで生きてでもいるかのように飲み込むと書庫の中が青く輝く光につつまれていく。扉がゆっくりときしんだ音を立てながら独りでに閉じていく。

カミンの藍色の瞳の中には勇希の顔が映っていた。かつて偉大と謳われた戦士と皇女は互いに瞳を逸らすことなく見つめ合っている。

残る四人の戦士達はただ静かに二人を見守っていた。カミンと勇希の痛みを自分達の心にも感じながら。

扉が完全に閉じようという時、勇希のセピア色の瞳はカミンの唇がそっと動くのに気付く。

「必ず、また、君を探しに行くよ」

聞こえないはずのカミンの優しい声が勇希の心の奥でこだましていた。

＊＊＊

扉が完全に閉まったかと思うと、書庫はまるでもともとそこには存在しなかったかのように消えうせていた。いや、消えていたのは扉だけではない。灯台の地下自体がそっくり消えてなくなっていたのである。

勇希と四人の仲間たちはいつの間にかどこまでも広がる海に向かって立つあの灯台の外にいることに気が付いた。今、西へ沈みかかった太陽の光が水の上に反射して金色のカーペットのような幻影を創り出している。

勇希の左眼から一筋の涙が流れ落ちた。

「もう、カミンを感じられない」

勇希は誰にともなくつぶやいた。

「カミンが…いなく、なっちゃった…」

そう言葉にするとたまらなく寂しくて、抑えていた何かが溢れ出すように涙が次から次へとこぼれては勇希の薔薇色の頬を濡らしていく。

「勇希…」

敬介がそっと声をかける。

勇希が振り向くと、紅劉国の四人の戦士たち–今はかけがえのない友たち―が、心配そうに勇希を見て立ち尽くしている。

「カミンが…逝っちゃった」

勇希は悲しみに顔を歪めると敬介の胸に顔をうずめていつまでも泣きじゃくった。

しばらくして、勇希がハンカチを取り出すと、その拍子に何かがはらりとポケットから落ちたが、勇希はそれに気付かない。

それはとても小さな白い紙切れだった。勇希の足元に落ちたその紙をそっと優しい風が夕日で紅く染まった空へと吹き上げる。

それはまるで小さなモンシロチョウのようにしばらく空中を漂った後、蒼い海の中へと落ちていった。その紙は海水に濡れ、印刷された赤いインクが鮮やかな血のようにコバルトブルーの海にそっと滲んでいく。

「彼の存在を導く星となるでしょう」

フォーチュン・クッキーのメッセージが潮の流れに揺らぎながら冷たい底なしの大海の底に静かに眠るように沈んでいった。

エピローグ

生命（たたかい）の終わり、そしてまた…

「もうあれから５０年か。信じられないがな」

敬介のしわがれた声が目の前の白い石碑に話し掛ける。彼の右にはすっかり年を取ったつくもが小さな花瓶に新鮮な野花を活けると蝋燭に灯を付けた。

あの最後の戦いから今日で５０年になる。今、この世に生き残っているのはたった二人になってしまった。

「勇希、もうカミンに会えたのか？」

敬介は誰に聞くともなく囁くと関節炎で奇妙に曲がった指で石碑の名前をそっとなぞってみる。

「みんな、どうしているんでしょうね…」

つくもは鼻をすすると皺の寄った目のふちからそっと涙を拭った。

「みんな大丈夫だよ、つくも。君だって知っているじゃないか」

敬介は妻の肩をそっと抱くと優しくそう呟いた。

＊＊＊

二人が家に帰ると、暗く静かなリビングに置かれた留守番電話に赤い光が点っていた。電光表示板が二人の留守にメッセージが一件入っていることを示していた。

つくもが気だるそうに再生ボタンを押す。

「お義父さん、お義母さん」

義理の息子の声が喜びで弾んでいる。

「孫が生まれました。女の子です。携帯に連絡ください。会いに来ていただけるよう、準備をしますから…」

＊＊＊

五ヵ月後、敬介とつくもはあの灯台のある小さな公園で海に面して

設置された長いベンチに腰掛けていた。暖かな太陽の日差しの中、敬介はただの老人よろしくうとうとと居眠りをしている。つくもはそんな夫の寝顔を見てそっと微笑んだ。今日の海は波もなく、穏やかで澄んでいた。優しい風が時折、海の潮の匂いを運んではつくもの鼻をくすぐった。

つくもの前には白いカバーにピンクのリボンで縁取りされた小さな乳母車が置かれていた。その中では小さな女の赤ん坊が安らかに眠っている。どこからか飛んできた真っ白な紙ひこうきが船をこいでいた敬介の顔に当たって乳母車の中にぽとりと落ちる。

敬介がけだるそうに目を開けると五歳ぐらいの男の子が敬介とつくもが座っていたベンチのすぐ側に立っているのが見えた。敬介は乳母車の中に落ちた紙ひこうきに気が付くと、それを拾って小さな男の子のほうに掲げてみせる。

「これ、ぼうずのか？」

男の子は何も言わずにただこくんとうなずいたが、その間も太くしっかりした眉の上できれいに切りそろえられた紺碧の前髪の下で男の子の藍色に輝く瞳はつくもの前の乳母車をじっと見つめている。

つくもはその視線に気付くと優しく微笑んで言う。

「私たちの孫でね、飛鳥っていうの。側に来ていいわよ」

男の子はまた無言のまま、こくんとうなずくとゆっくりと乳母車に近づいてきた。敬介はそんな男の子を不思議そうに見つめる。

「なんだか変わった子だな」

敬介はそう思い、軽く頭を掻いた。

乳母車の中では、小さな女の赤ん坊がベビーピンクのリボンで縁取りされた真っ白な毛布に包まれて幸せそうに眠っている。

男の子は乳母車の赤ん坊に静かに微笑みかける。その大人びた表情はまるで五歳児のようには見えなかった。

「なあ、ぼうず、名前は何てんだ？」

敬介は先ほどの紙ひこうきを折りなおしながら何気なく聞いた。

「カミン」

男の子は子供らしいかわいい声で答える。

つくもと敬介ははっとしてお互い顔を見合わせた。

「今、あなた、なんて？」

つくもはあわてて少年に聞き返す。

「僕、克己（かつみ）です。すぐ近くに住んでるんだ」

克己はわざと悪い冗談で二人を驚かしてやった、というような少し意地悪な微笑みを浮かべて二人の顔を見上げた。

「あ…あ…」

と、突然、乳母車の中の赤ん坊が目を開けると克己のほうへその小さな右手を差し出す。克己は振り向くと、自分も右手をその小さな赤ん坊に向けて差し出した。克己が小さな手で自分よりも小さな赤ん坊の手を握り締めると飛鳥は大きなセピア色の瞳を見開いた。

敬介とつくもは二人の子供の様子をじっとうかがっていた。二人の脳裏には同じ考えが浮かんでいた。

「昔、いつかどこかでこの子供達を知っているような気がする」

と。

そして赤ん坊の飛鳥はいままで敬介やつくもが見たことのないような幸せそうな笑みを浮かべた。小さな男の子もやはり優しい笑みを浮かべながらそっと囁く。

「やっと見つけた。僕の大切なひと」

「！」

つくもと敬介はその言葉に思わず息を飲むと互いに顔を見合わせる。だが、二人の口から出てくる言葉は何もなかった。

「かつみ～！」

灯台近くの通りから若い女性が子供の名前を呼んでいる。

「いらっしゃい、もうすぐお昼にするわよ」

大声でそう叫んでから、克己の側に立っていた老夫婦に気が付いた

らしく、女はそっと軽く会釈する。

「母さんだ」

克己は言った。

「僕、もう行かなきゃ。でも…でも、僕、また飛鳥ちゃんと会えるかな？」

克己の藍色の瞳がまだショックから覚めやらない表情のつくもを見つめる。つくもはまるで舌を切られたかのように何も言えずにいた。

そんなつくもを労わるかのように敬介はそっと優しく妻の肩をなでると克己に先ほどの紙ひこうきを手渡して、

「ああ。もちろんさ。おじさんたちは駅の方に住んでいるんだが、ここにはよく午前中飛鳥を連れて来ているから」

と優しい声で言った。

克己は紙ひこうきを受け取ると、何か言いたそうに飛鳥が寝かされている乳母車を振り返ったが結局何も言わなかった。

代わりに、敬介とつくもに向かって微笑むとこくんと頷いてみせる。まるで何も言わなくても分かり合える、そう言っているように。

やがて、克己は踵を返すと母親の待つ通りのほうへと走り去っていった。

「やっと、あの子は探し物（愛しいひと）を見つけることができた

のね」

つくもはあの不思議な男の子とその母親が少し前に立ち去った何もない空間をじっと見つめてぼそりと呟いた。

「ああ、そうらしい」

敬介は片手で愛する妻の細い肩をそっと抱くと力強くうなずいた。まるで、自分自身に言い聞かせるように。

二人は長い間その場に立ち尽くして、ただ、克己と言う名の男の子が向かった先をじっと見つめていた。また、すぐにあの男の子に会えること、そして今度こそ、あの子が本当に幸せになれることを信じて…。

二人の耳にまるで次の世代の新しい冒険の始まりを祝福するかのように穏やかな潮騒の音が静かにさざめいていた。

エピローグ（後書き）

最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。ご意見、ご感想などありましたらぜひコメントお願いいたしますm（＿＿）m

続きもまだの方はよければ読んでいただけると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9681e/

Guiding Star

2010年10月8日14時12分発行